演藝畫報

名世尾上菊名郎追善號

第十年五月號

昭和二年十月廿五日 第三種郵便物認可
昭和十年四月廿日 印刷納本
昭和十年五月一日 發行（一日發行）
「演藝畫報」第百四輯 第十年 五月號

天光軒滿月

専屬を誇るタイヘイの至寶

萩原四朗 原作

嵐の孤児

前篇 後篇 各二枚
（一枚壹圓）

惻々と迫る哀愁
魂も疼く感激
地上生きとし生けるもの
涙なくしてこの悲曲を聽くものなし

タイヘイレコード

風味必ず御氣に召す

天ぷら御料理

季節向御料理

佛蘭西御料理

芝居情緒と食道樂

喜久屋食堂

道頓堀戎橋北詰

御芝居の歸りには打ち揃ふて

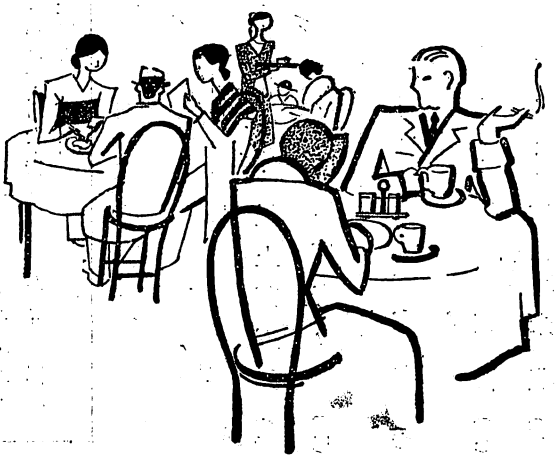
お座席で是非御會食を！

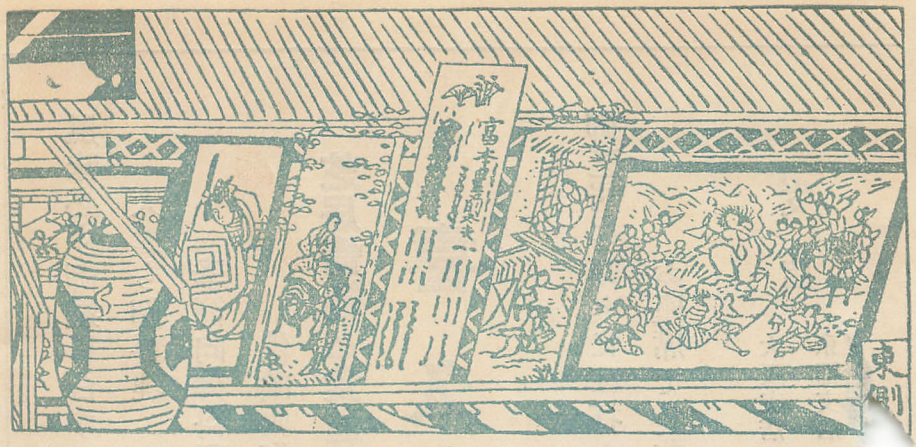
支店

大阪支店　心齋橋筋八幡筋角

北新地裏町

京都支店　木屋町ドングリ橋





◇道頓堀・昭和十年五月號・第百四輯◇

★口絵★

◎歌舞伎座◎口上・五代目の土蜘と直侍・六代目の土蜘・羽左の頼光・菊五郎の德兵衛・福助の道風・延若の駄六・羽左の與右衛門・菊のかさね・魁車の皆鶴姫・幸四郎の法眼◎文樂座◎大井川・壇浦兜軍記◎京都南座◎二人妻・井上の新吉・喜多村のお雪・河合の悅子◎浪花座◎たつた一人の女・街の風景・だんまり鼠の洞◎松竹劇場◎關西新派◎角座◎櫻田事變・血煙荒神山

★表紙　五代目の土蜘古版畫

★扉　六代目の土蜘スケッチ

思ひ出話……尾上菊五郎（二）
安く評價された菊五郎……伊原青々園（四）
五代目・六代目（俳句）……入江來布（七）
子を透して觀る……津村京村（八）
五代目菊五郎斷章……濱村米藏（一〇）
五代目の宣傳上手……大澤休象（一六）
「新古演劇十種」解說……西尾福三郎（二）

菊五郎系譜……紙魚庵（一六）
五世菊五郎漫畫追善……まんがのページ……（二〇）
六代目の舞踊……中内蝶二（二四）
羽根の禿とうかれ坊主……川尻清譚（二六）
六代目へ注文……中山楠雄（二九）
菊五郎の藝術……丸山耕（三〇）
「姿」の役者・羽左……山口廣一（三四）
菊畑の話……平松俊一（三六）
入門秘話……速見正治（三三）
襲名する人々……大橋孝一郎（三〇）
前進座斷想……高山辰三（三八）
吾等の前進座前進譜……河原崎長十郎（四〇）
中村翫右衛門（四二）

編輯後記……田中滿彦

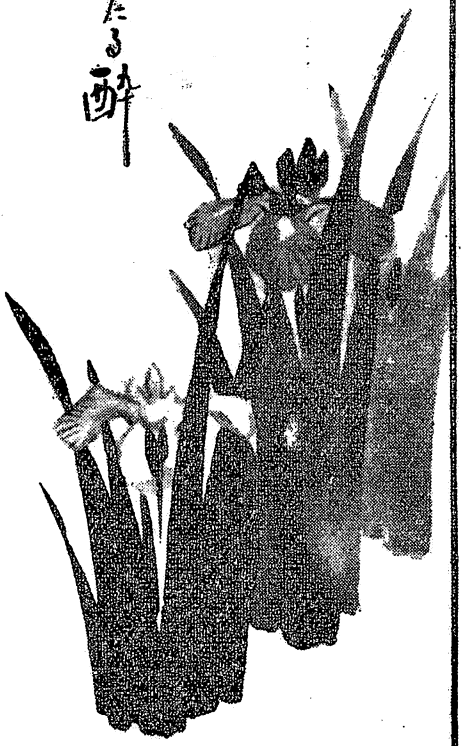
天下の銘酒

白雪

シラユキ

清冽の味

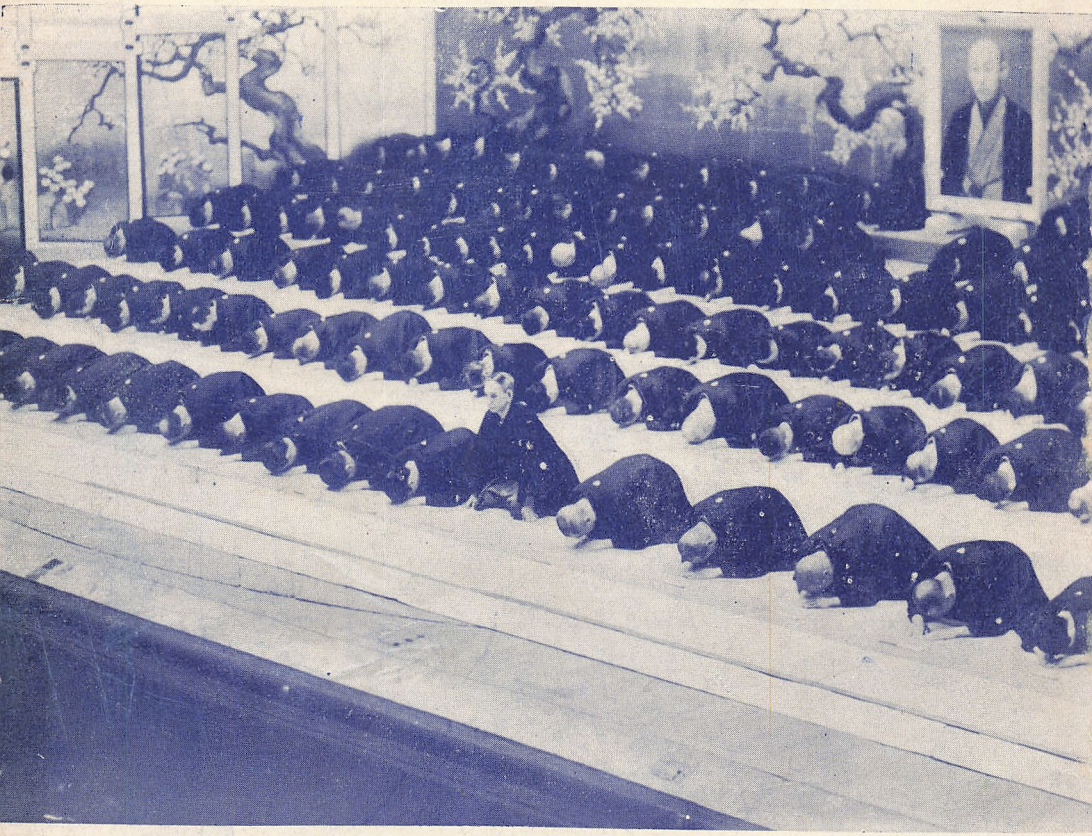
陶然たる醉



摂津 伊丹・灘

小西酒造株式會社

五世尾上菊五郎三十三回忌追善興行 口上



歌舞伎座の晝の部の「かさね」と「土蜘」との間に追善口上の一幕がある、東西歌舞伎の大名題にキネマの尾上菊太郎、尾上榮五郎及びレヴューの尾上菊藏なども列座二百餘名が舞臺一杯の雛壇に居並んだ樣は滿場を壓する

の超豪華版

先づ市村羽左衛門が口上第一聲を擧げて五代目との緣故をのべ、故人梅幸と共に五代目の薫陶を受けた時代の思出など滿場の拍手に迎へられる、次いで丑之助改め菊之助豊改め松緑、龜三郎改め菊水、伊三郎改め松助の襲名披露が終るとそのあとを幸四郎が引きとり九代目團十郎と五代目菊五郎の關係から高麗屋と尾上家の因緣を語る

その次が我童、三津五郎、三升、關西方へ廻り梅玉、魁車、長三郎、市藏、延若で大阪方が終ると菊五郎、彦三郎がこの花々しい追善興行の謝辭をのべる

更に最後を羽左衛門がとつて何時もの「すみからすみまでずいつと」とあの名調子に萬雷の拍手を浴びてゐる

五世尾上菊五郎の「土蜘」

五世　尾上菊五郎の「直侍」

五世尾上菊五郎
三十三回忌追善興行

五月の歌舞伎座

「土蜘」
〃叡山の僧智籌
實ば土蜘の精〃
尾上菊五郎

〃源頼光〃 市村羽左衛門

「土蜘」舞臺面

梅幸なき後六代目の土蜘は、我々の興味をそゝるものだが特に羽左衛門が源頼光で附き合ひ外に幸四郎の平井保昌、四天王には龜藏、高助、高麗藏、家橘の中堅腕達者揃ひが出演、尚番卒には三津五郎、彦三郎、長三郎、松本豊改め松緑の役揃ひ、六代目の一子丑之助改め菊之助の胡蝶に、中村芳子の石神、男女藏の巫子等東西の大名題花形を網羅した大舞臺、これに長唄は歌舞伎座初出演の松永和風始め杵屋寒玉、望月太左衛門、柏伊三郎社中の一流揃ひが出演

五月上旬出演

春興行

新喜劇優秀の大顔合せ

◇開幕時間◇

尾上鐘春曙　天竺徳兵衛（六時）　前賣　一等席一円八十錢　五日前より發賣

◇開幕時間◇

畫

菅原傳授手習鑑

道明寺の場（午前十一時卅分）

寺子屋の場（午後一時三五分）

夜

青柳硯（六時四五分）

色彩間刈豆

のかさね（三時）

羽根の禿（七時三〇分）

二等席二円五十錢　三等席一円五十錢　御觀劇の前日より發賣

部

土口上（三時五五分）

鬼一法眼三略卷

菊畑（八時一五分）

部

蜘（四時三〇分）

雪暮夜入谷畦道

三千歳（九時二〇分）

あやめの樂（十時四五分）

出演

松水和風　望月太左衛門　柏伊三郎　杵屋寒玉　清元延壽太夫　社中

前賣團体專用電話（戎）二八二六　二八二八

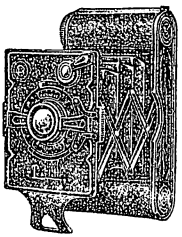
大阪歌舞伎座

果然人氣の嵐

見逃せぬ大歌舞伎

◇櫻席（一円）菊席（一円五十錢）は御觀劇當日に切符發賣!!

◇お望みの時間に好きな芝居が見られる一幕券は毎開幕前に發賣◇



小型寫眞器

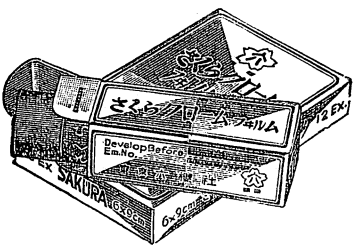
パーレット

ヴエスト判

單玉	一七、〇〇	
F 6.3	二八、〇〇	

さくらクローム フイルム

到る處の寫眞器店にあり



發賣元

大阪長堀橋

小西六大阪支店

天竺德兵衛
尾上菊五郎

「音菊天竺德兵衛」

五世尾上菊五郎
三十三回忌追善興行

—五月の歌舞伎座—

五世尾上菊五郎
三十三回忌追善興行

「青柳硯」

"小野道風"　中村梅玉

"獨鈷の駄六"　若延川實

五月の
歌舞伎座

五世尾上菊五郎
三十三回忌追善興行

かさね
與右衛門　色彩間苅豆

與右衛門……市村羽左衛門
かさね……尾上菊五郎

五世尾上菊五郎
三十三回忌追善興行

五月の歌舞伎座

「鬼一法眼三略卷」

鬼一法眼—松本幸四郎

皆鶴姫—中村魁車

奴虎藏—市村羽左衛門

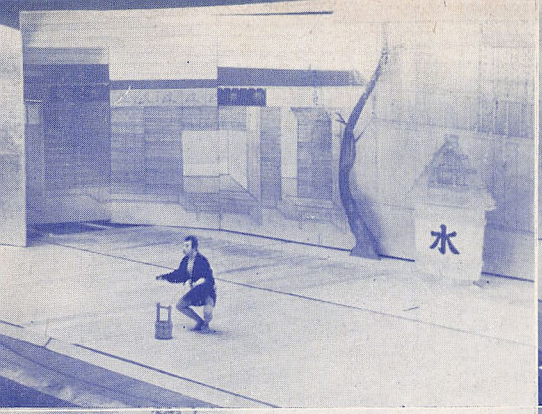
"奴智惠内" 尾上菊五郎

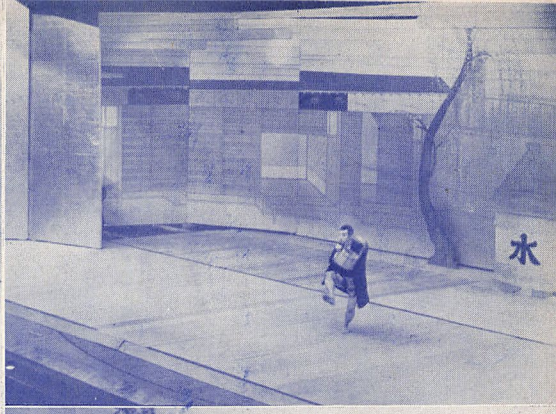
"奴虎藏" 市村羽左衛門

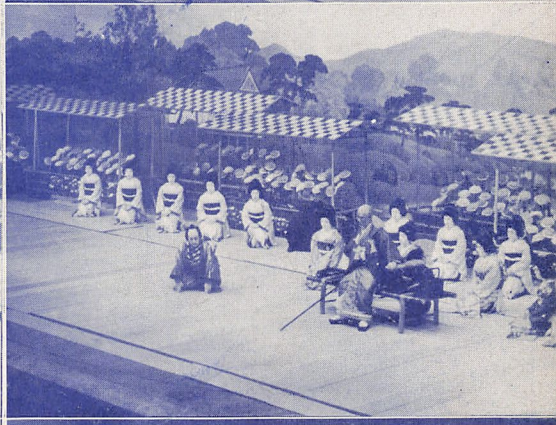
「鬼一法眼三略巻」

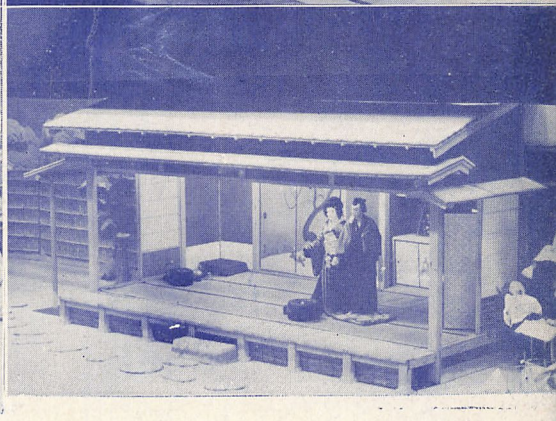
—五月の歌舞伎座—

五世尾上菊五郎
三十三回忌追善興行









〃主坊れかう〃　〃全　右〃

〃鬼一法眼三略巻〃　〃全　右〃

〃雪暮夜入谷畦道〃　〃鬼一法眼三略巻〃

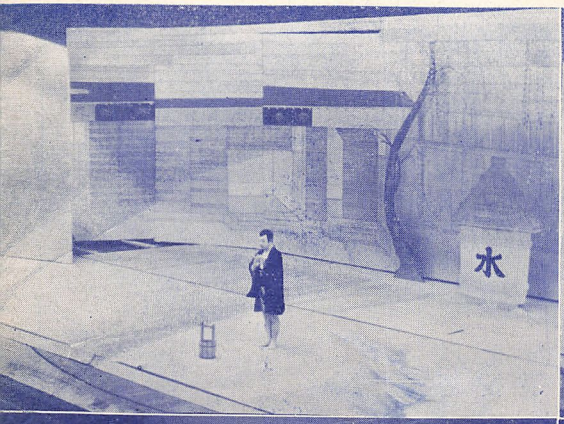
五世　尾上菊五郎
三十三回忌追善興行

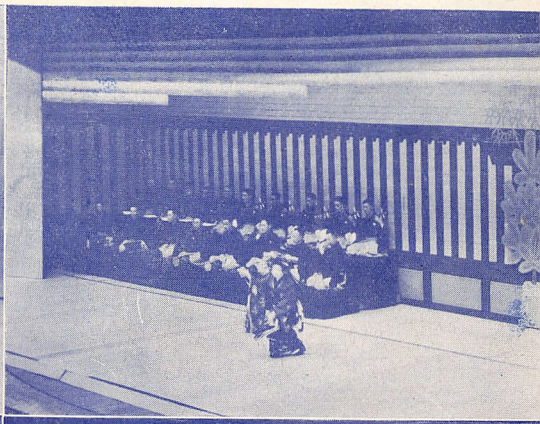
—五月の歌舞伎座—

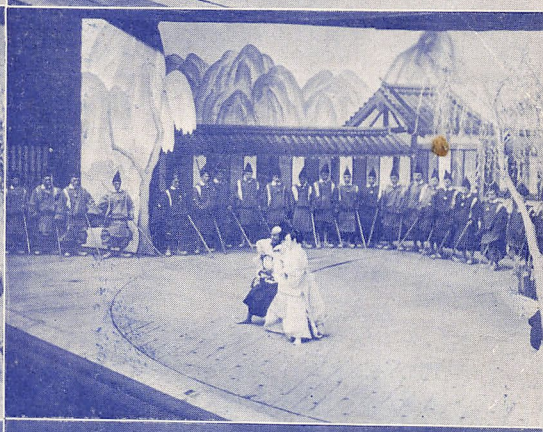
〃羽根の禿〃　〃うかれ坊主〃

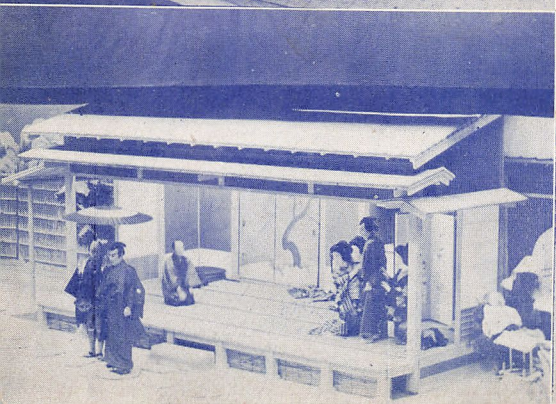
〃青柳硯〃　〃右全〃

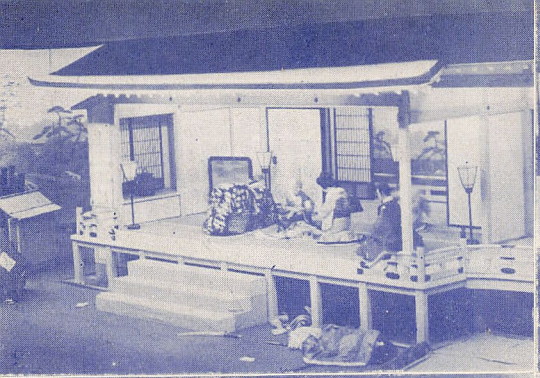
〃雪暮夜入谷畦道〃　〃右全〃

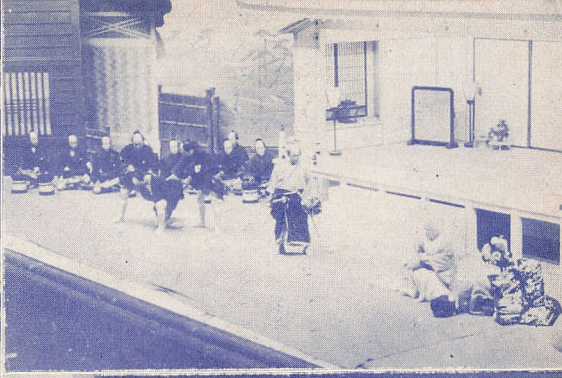


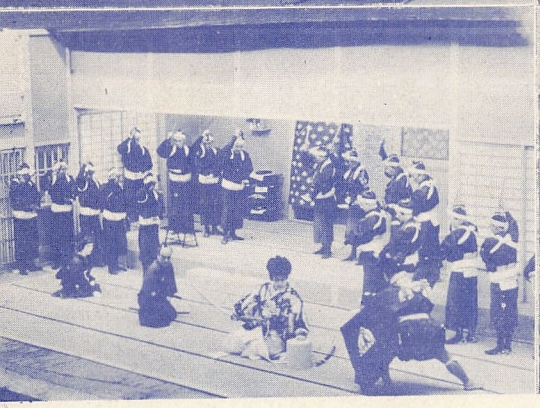


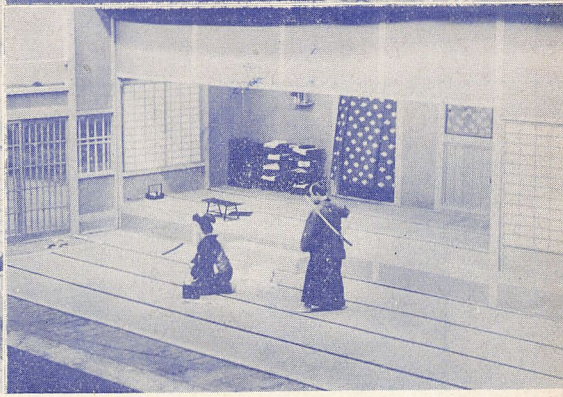












◇舞臺面◇　　◇菅原傳授手習鑑◇

五世尾上菊五郎

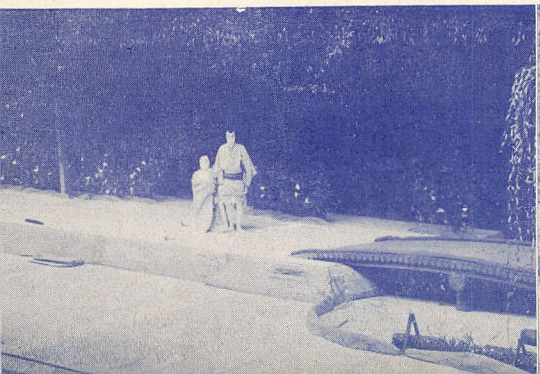
三十三回忌追善興行

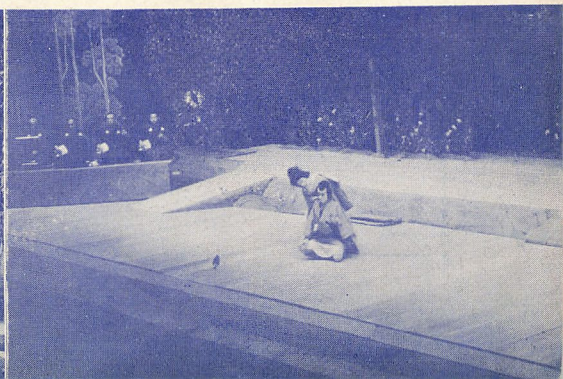
五月の歌舞伎座

◇色彩問苅豆◇

與右工門…市村羽左衛門

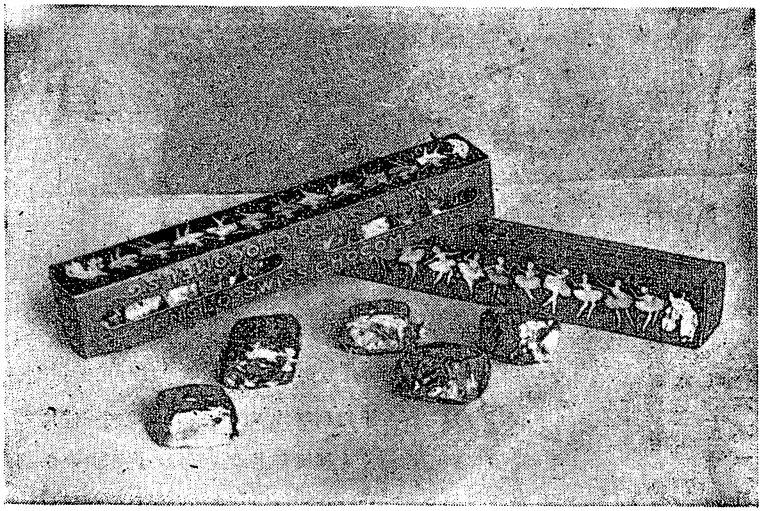
かさね…尾上菊五郎





アングロス井ス
ミルクチヨコレート
コーヒキャラメル
チヨコレート
キャラメル
チヨコメル

大阪市東區豐後町三番地
發賣元 株式會社 横山商店
電話東(94)四二一六六六〇一三一四九番



松竹衣裳部

本　店　大阪市浪速區南坂町松竹ビル內
電　話　戎五六三四番
東京支店　東京市淺草區駒形町二十三番地
電　話　淺草六六六一番

小道具・小裂

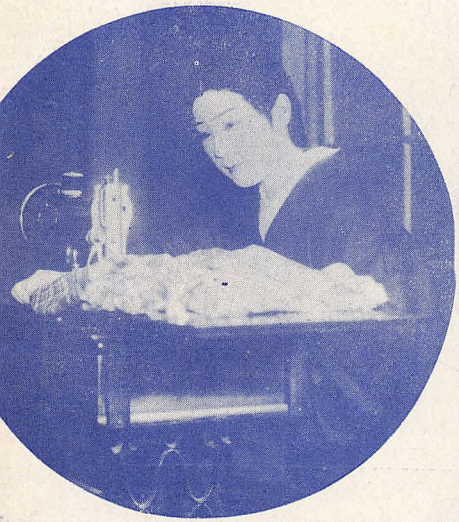
貸衣裳

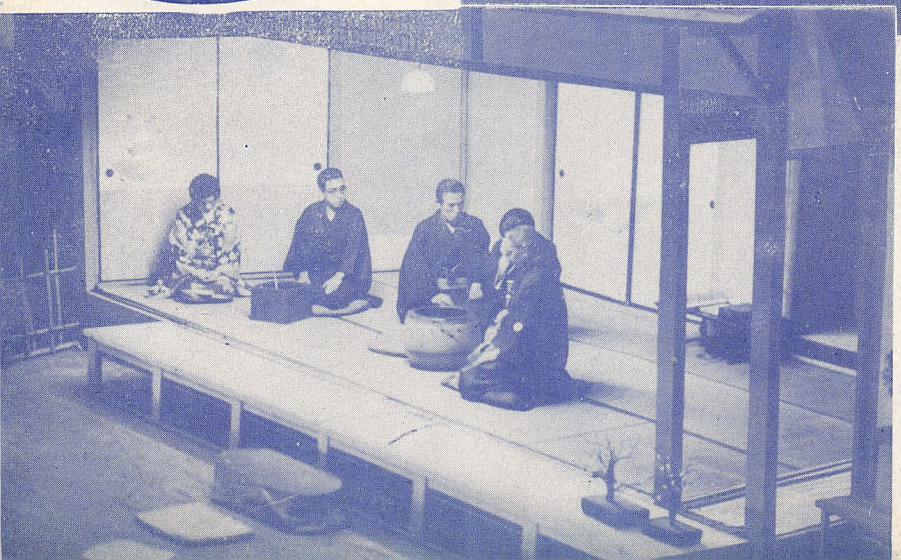
素人演藝會
宴會の催物
春秋溫習會
婚禮の衣裳

其他一般の衣裳多少不拘御用利下
さいお御來客の御相談に應じ便利よく
お取計ひ致します……

「記軍嫩谷の一」
「記軍兜浦檀」

「話顏朝寫生」 石下
「衣舞女容艶」 左下





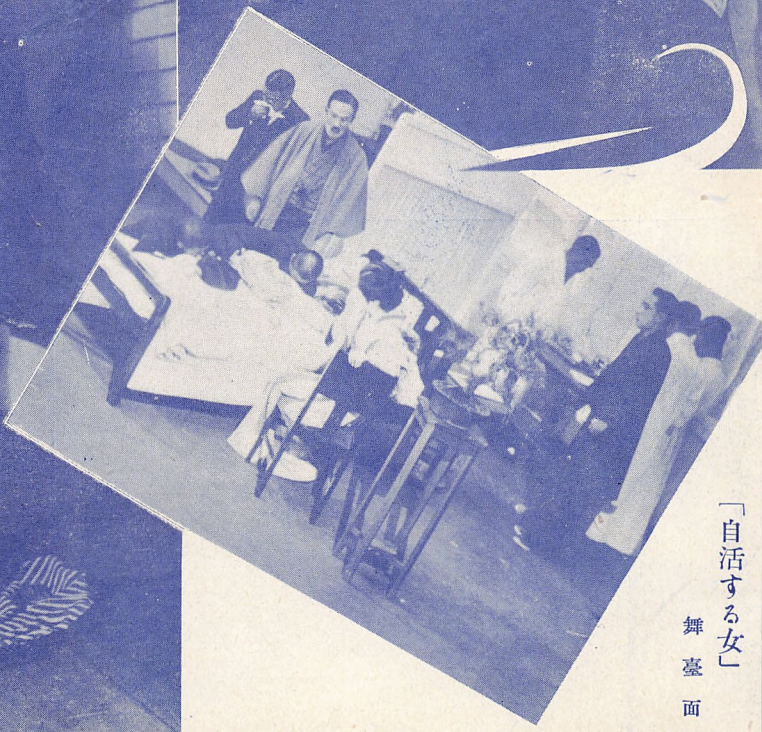
「二人妻」

俊策…井上　新吉…大矢
精二…伊志井　君子…花柳
靜枝…森　悅子…河合

東京新派劇・五月の南座

「二人妻」　お雪…喜多村
　　俊策…井上

「自活する女」　お仙…花柳



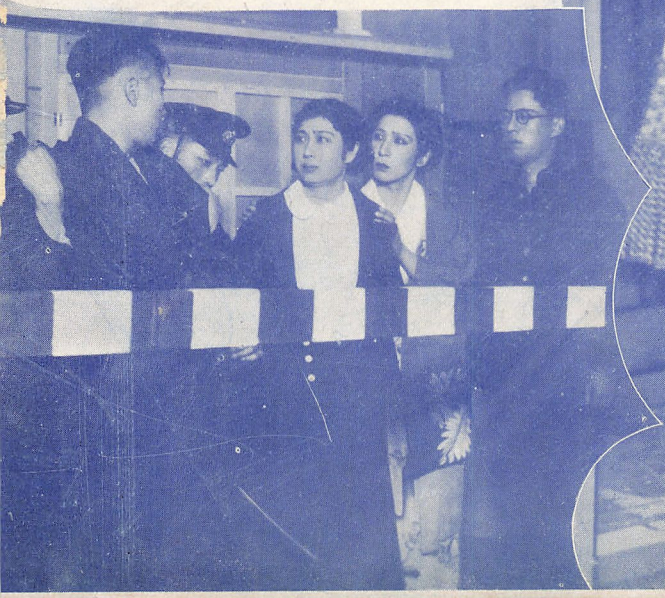
「自活する女」
舞臺面

前進座
五月浪花座公演

「だんまり鼠の洞」
〃手塚妻唐衣 〃河原崎國太郎

「たつた一人の女」
〃六ツ又の和四郎 〃中村翫右衛門

「街の風景」 舞臺面



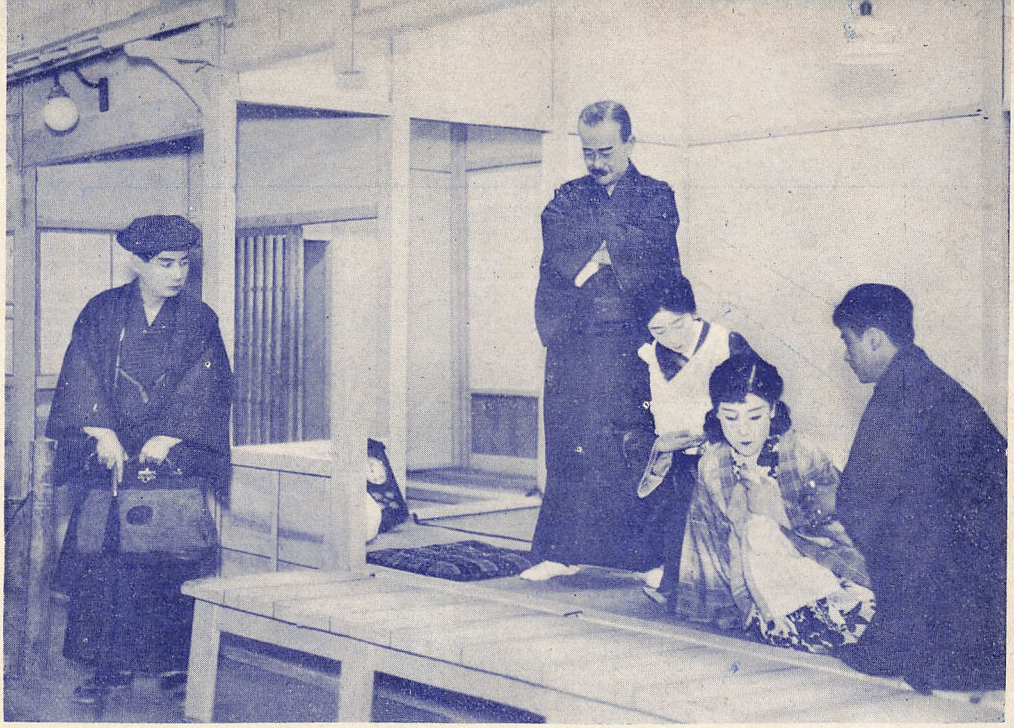
五月　前進座　浪花座　公演

「戀の旗本退屈男」

〃三日月治平　瀬川菊之亟

〃明星金吾　中村公三郎

〃早乙女主水之介　河原崎長十郎



五月の中座
松竹家庭劇

（上）

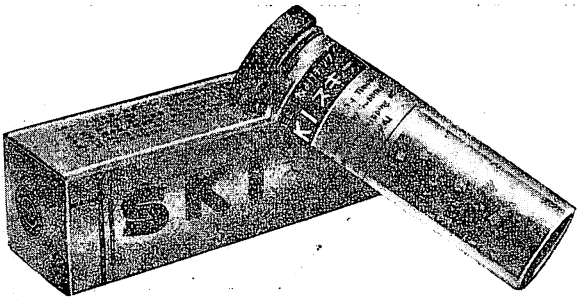
「草若の嵐」

田　山‥‥作健富田
織　小‥‥助重田桐
　　東‥‥勇　吉
河　石‥‥江靜宮松
安　元‥‥進　瀬川

（下）

「情友の街裏」

織　小‥‥橋倉人主
外　天‥‥一貞子息
　　東‥‥妙　お
吾　十‥‥平吾　父



カユミ止
蚊よけ
チック型

SKI スキー

毒虫ノ襲來ヲ防ゲ

蚊、蠅、蚤、南京虫、蟻、毛虫

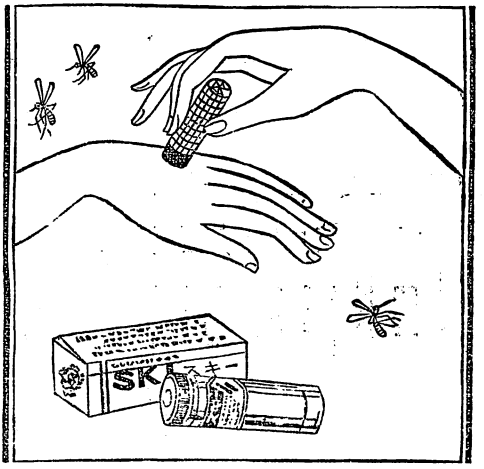
等嫌ナ毒虫モ**スキー**ノ使用ニ依テ完全ニ驅逐ス

カユミヲ止メヨ

之等毒虫ノ刺スコトニ依テ起ル**カユミ**ヲ即座ニ解消スル新劑ニシテ大人ハ勿論幼兒ト雖モ度々使用スルニ何等皮膚ヲ害セズ又發汗ノ防害ヲモナサズ無脂肪性ナレバ感觸ヨク佳香ニ富ム且瘙痒部ノ搔傷ニヨル化膿菌ノ侵入ヲ防ギ皮膚炎ノ豫防ヲナス

スキー使用

チック型ナレバ使用上非常ニ簡便ニシテ右圖ノ如ク銀包紙ノ所ヲ持ツテ藥品ノ露出部ヲ目的ノ個所ニ輕ク塗擦スレバ足ル



價 四十錢

製造發賣元

大阪市東區伏見町三丁目二七

光榮商會

電話本局三三一五番
振替大阪三三一一七番

本邦最大の生命保險會社

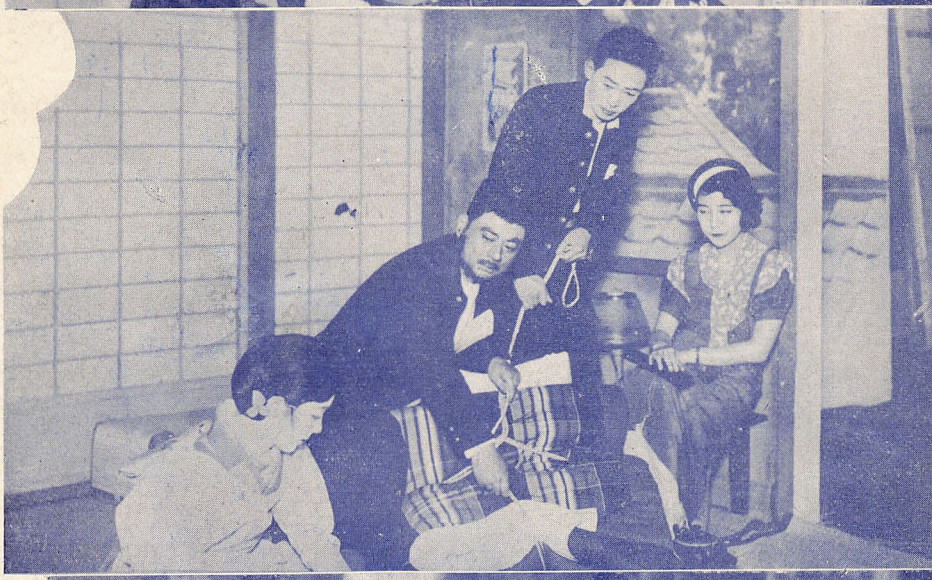
我社は不拔の基礎の
上に立ち、百十餘萬
御加入者の絶對信賴
の下に不斷の躍進を
續けて居ります。

日本生命

大阪市東区今橋四丁目

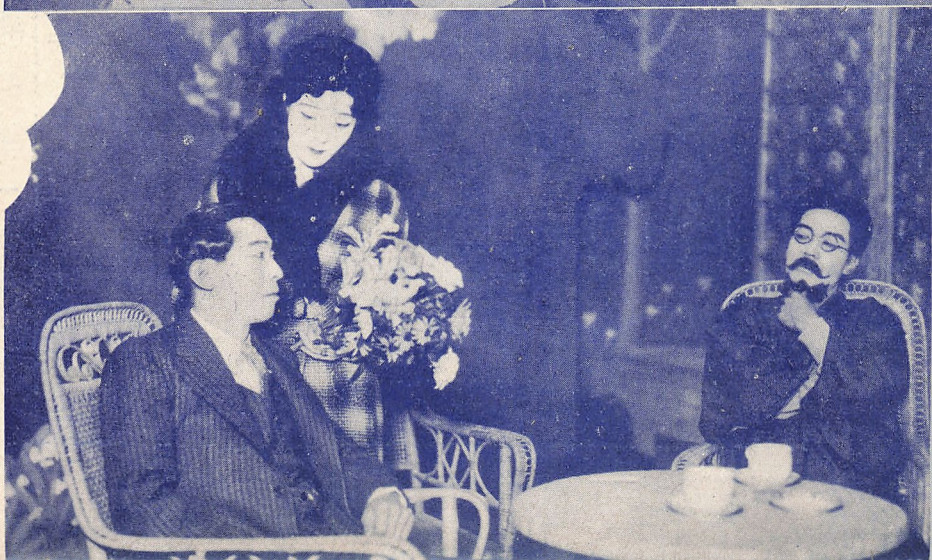
神戸 松竹劇場・關西新派劇

（上）「戀人形」



（中）「空は青いぞ」

（下）「マダムX」



—五月公演—

「櫻田事變」

お宮——小松孝子

旅僧忍海——辻野良一

五月の角座

辻野良一奮闘劇

お目見得

「血煙荒神山」

吉良の仁吉—辻野良一

新緑の京阪沿線

びわ湖

竹生島めぐり
近江八景めぐり

比叡山

八瀬大原
鞍馬貴船

愛宕山

清瀧高雄
水尾落合

天王山

八幡牧野
摂津耶馬溪

日本一
新緑

宇治
嵐山

案内書進呈

心齋橋筋つるや前
京阪案内所

階上 京阪喫茶店

新興キネマ躍進豪華陣

全發聲　月形龍之助、杉山昌三九
森　靜子、久松三津枝

長崎留學生

野淵昶第一回作品　オールスター

鈴木澄子、尾上榮五郎　主演

お傳地獄

全發聲　オールスターキャスト

嵐　寛壽郎の全發聲

荒木又右衛門

新興、松竹、第一、俳優總動員

阪東妻三郎の全發聲

新納千代鶴

新興、第一、松竹、俳優總動員

高田　稔　最初のオールトーキー

男三十前

伏見信子他　オールスターキャスト

森　靜子　主演　オールトーキー

嬰兒殺し

西鐵平作品　京都オールスターキャスト

山路ふみ子、東海太郎　主演

國境の町

オールトーキー　東京オールスター

伏見信子　一回主演　オールトーキー

稽古扇

伏見直江、田中春男、立桝晃

新興キネマ株式會社大阪支社

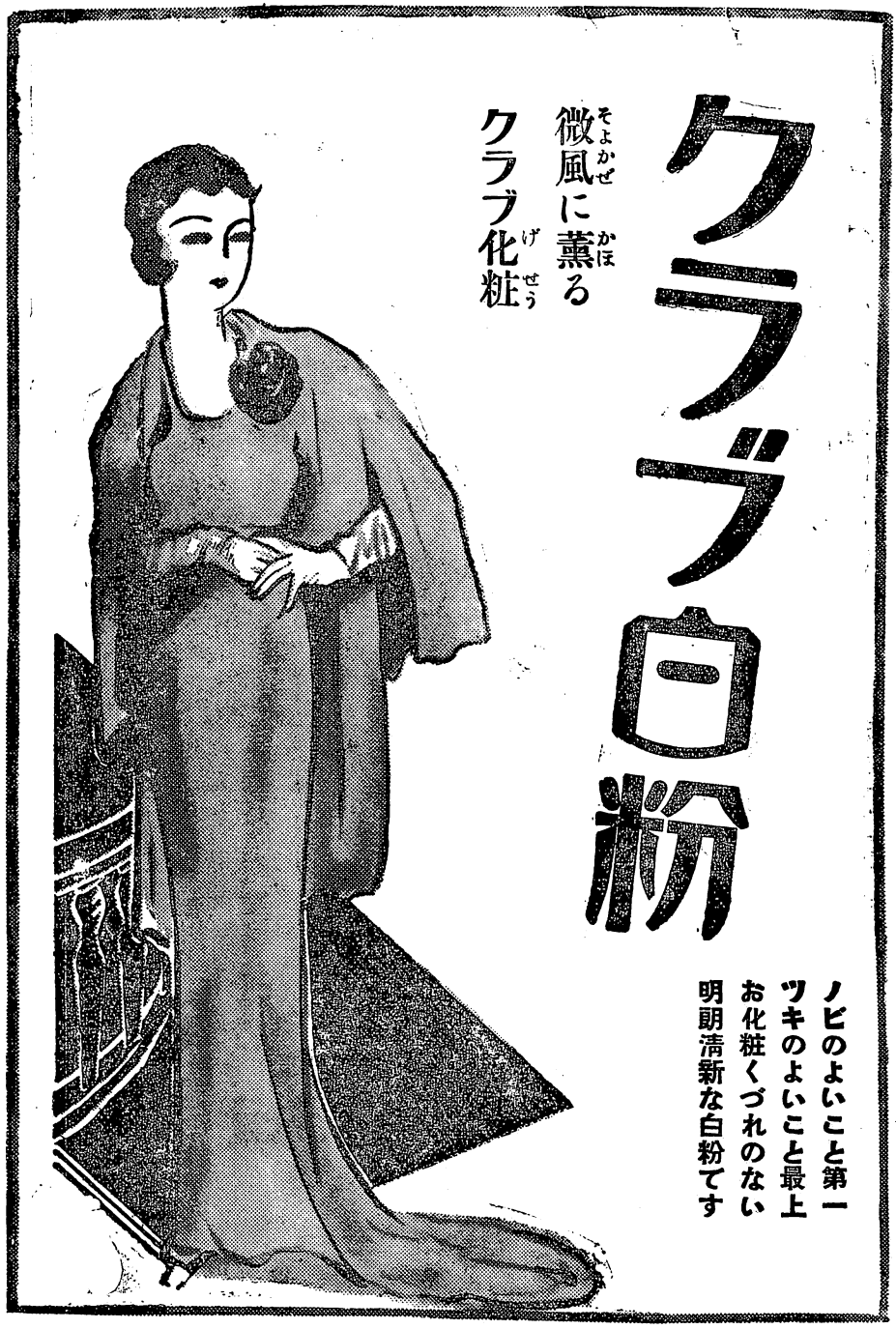
ムーレの園

赤い帽子に
白の制服を
着た
御園クレームの花を
はバラの
想はす様な芳
香を以て心地
よくバラッシ
コし健やかな
美しい肌を作
り上げます

ソセ五十三....型　大
ソセ五十二....型　小
ソセ五十三..型とあぱで

グンシツニアヴ

伊東胡蝶園
東京・大阪


クラブ白粉
微風に薫る
クラブ化粧
ノビのよいこと第一
ツキのよいこと最上
お化粧くづれのない
明朗清新な白粉です

月刊・演劇研究・雜誌

演藝畫報

第十年

五月號

第百四輯

五月の歌舞伎座

土蜘

尾上菊五郎

思ひ出話

尾上菊五郎

私は五代目菊五郎の伜で御座ゐますが、本眞は父よりも返つて團十郎のおぢさんの教へを受けた方が多かつたので御座ゐます。と云ひますのは、私は未だ十三才の時、歌舞伎座で「忠臣藏」の幇間の役に出て「ゆうべの夢見て大きいものは……」と云ふ大きいもの盡しの踊りを踊りましたときのこと、それを由良之助の役で二重から見ておりました團十郎が傍にゐた九太夫の松助に向つて「オイ栗原（栗原と云ふのは松助の姓であります）丑坊（私の事です）は中々踊れるな」と云つたので松助は嬉しさの儘、「旦那、何卒ウンと仕込むでやつて下さい」と頼むと、團十郎の返事が、「お前から頼まれたんじやァいけないが、寺島からの話なら引受けてもいゝ」と云つたので、此の幕が締ると松助は、早速親父の部居へ來て此の一件を話しますと、親父も喜んで、其の晩團十郎のもとを訪れ、「先刻松助から聞いたら、お前さんがうちの伜の踊に見込があると云つて呉れたさうだが、一ツミッチリ仕込んで貰へまいか」と云ふと、團十郎は「丑坊はお前の伜じやアないか、お前の手で仕込んでやんなさい」と云ふので親父がイヤ、そうじやァぬエ、踊にかけちやァ日本一のお前さんだ、私の一生の頼だから、どうか伜をいゝ役者にしてやつておくんなさい」との話合ひから、團十郎も「寺島、お前がそれ程云ふのなら俺が確かに

引受けるが、その替り、一切委してくれなけりやあ困るぜ」と念を押されたそうで、それから間もなく私は築地の團十郎の家へ通ふやうになつたのです。處でその稽古の嚴しいことは申すまでも御座いませんその上に何しろ一つの踊りを仕上げる迄には一年から一年半も掛つた事があります。始め一順は一ケ月位で上つて了つても、それから繰返して八釜しく直されて行くのです。丁度「子寶」の踊りが仕上つた時でした。團十郎は一度家の親父に見せたいと云つて、親父を招待して呉れたので、親父も喜んで出かけて來ました。そこで團十郎が「子寶」を踊らせてから云ふことは「どうだ寺島、よく覺えたらう」と云ふと、家の親父は目に一パイ涙を溜めて、眞心から嬉しさうに「堀越有難い、實に結構なものだ」と禮を云ひました。すると團十郎も亦嬉しさうな顏をして「寺島に褒めて貰へば俺も滿足だ。イヤどうも有難う。」と禮を云つたので、私は此の時、自分は菊五郎の子か、それとも團十郎の子なのか、判らなくなつて終ひました。

五世菊五郎逸話集

流行に留意

五代目菊五郎は常に流行に心掛けてゐた、客が何か新しい物を持つて居ても一寸借して呉れと云つて直ぐ舞臺へ持ち出し見物にそれを見せる等の癖があつた。この癖は食べ物でも同じで「オイ是れは何處其處の名物だサウだ一寸食つて見ネー」と云つて爪の垢ほどづゝでも其處に居る者は門弟から男衆にまで味はせて見せる人であつた。

☆

懐中時計が未だ珍らしい時代五代目は既にこれに目を付けて明治四年九月の中村座で「東海奇談音兒館」と云ふ狂言を出した時、日本駄右衛門に扮して袴の間から懐中時計を出して見ながら「時計も丁度十二時過ぎ、是れからそろ〳〵こつちの世界」と云ふのをキツカケに下座で「雲か山」かの山陽の詩吟を入れてゆう〳〵花道へ這入り、非常に大受けをしたといふ。

菊五郎英語を學ぶ

優は明治四年に洋服を着て英語を學んだ事がある。それは此年の十二月發行した日要新聞の第一號に斯う云ふ事が書いてある

○俳優尾上菊五郎ハ活氣ノ性ナリシガ、此頃洋學ヲ修行シ洋服ヲ着シ、長履ヲ穿チテ樂屋入ヲナシ、歸宅ノ後ハ椅子ニヨツテ勉學最中ノヨシ。やくしやスラ、カヽル行狀ナルヲ世間ノ壯士安閑トシテ過サン事恥ツベキノ甚ダシキニアラズヤ

安く評價された菊五郎

伊原青々園

五代目菊五郎が、九代目團十郎と共に、明治の劇壇に輝いた二つの巨星であつたことは言ふまでもありません。しかし當時の周圍が彼等を待遇した有様を見ると、その間に徑庭があつて、つまり團十郎ほどは菊五郎が待遇されて居なかつたのであります。それには、金錢のことをいふと賤いやうに聞こえますが、兩人が劇場から受取つた給料の額を見ると、一番早分かりがします。新富座が全盛だつた明治十五年ごろに團十郎が一興行千圓で、菊五郎が七百圓、それから歌舞伎座時代の晩年になつて、團十郎が六千圓、菊五郎が三千八百圓そういふ具合になつて居ます。

何うして、こんな相違があつたかといへば、つまり菊五郎よりも團十郎にそれだけ多くの興行價値があつたからであります。なぜ、團十郎に興行價値が多かつたかといへば、江戸が改まつて東京となり、舊い社會がこわれて、新らしい文明が入込んで來る、大名や旗本が影を隱して薩長士肥のお髯さんが要路に立つやうになつたと同樣に、芝居の見物も、江戸つ子が少くなつて、田舍者が幅を利かすやうになる、そういふ人たちには在來りの芝居の細かい味は分からないで、只アラだけが眼について居るところへ、一方には外國の芝居を見て來て、日本の芝居もその通りにしなくては成らないと主張する人がある。政治でも學問でも歐米を崇拜した時代だから芝居でもさういふ說が一も二もなく受入られる。それが明治初年に於ける劇壇の大勢でありましたが、團十郎は丁度その風潮に乘つたのでもあり、また當人の持つて生まれた素質がそうであつた所から、謂はゆる「活歷芝居」といふ改良演劇をやり出して、成るべく歷史の本文通りを芝居で見せる、それも主人公は加藤淸正とか、大石良雄とか、忠臣義士、もしくは英雄豪傑に限る、そうして芝居を高尙なもの、または古雅なものにしようとしました。ところが其方が新時代の見物には歡迎されました。尤も見物そのものが、江戸時代の昔は

芝居は士君子の行く處でないとされて居たのを、新時代になつてから、高官も行けば學者も行くやうになつて、そういふ上流階級または知識階級の見物が專ら團十郎の改良演劇を歡迎したのであります。江戸ッ子や下層階級の見物は在來りの芝居と勝手が違ひ過ぎるので、面白くないとか、分らないとか、惡口をいつたけれど、昔ならば彼等が見物の主力であるから、其の言分が通つたであらうが、今では、前にいつた通り、御歷々の高官や學者が牛耳を執つて居るから、彼等は泣寢入りするより他はありませんでした。そこで團十郎の興行價値がいよ〳〵高いものとなり、隨つて劇場からも多分の給料を拂ふといふ結果になつたのであります。

それと反對なのは菊五郎でした。彼れは團十郎のやうに、うまく新時代に順應する藝當が出來ませんでした。それは團十郎と同じやうに、一つは彼れの素質がそうさせたのでありましようが、もう一つは父祖以來の傳統からと、かつは彼れが名人小團次の薫陶を受けたゝめに、最も得意とする所は世話物でした。その世話物は父祖傳來の「天笠德兵衛」や「四谷怪談」もあるし、小團次がした「鼠小僧」や「十六夜清心」もある、また團十郎の活歷がそうであつたと同じやうに、彼れのた[illegible]「[illegible]阿彌の書いた新作、例へば「直侍」や「筆屋幸兵衛」[illegible]ました。そうして、その新作の中には特に新時代に迎合すべく書かれた「明石の島藏」や「高橋お傳」のやうなザンギリ物さへありました。しかし全體に世話物そのものは、御歷々の見物には毛嫌ひされました。團十郎のして居る忠臣義士や英雄豪傑の芝居に現を拔かした上流階級や知識階級は菊五郎の世話物を見て下品だと罵りました。また殘酷だとも、淫猥だともいひました。そうして菊五郎は、頭の古い、時世に後れた役者だともいひました。勿論一般の人がそうではなくて、團十郎の改良演劇に滿足しないやうな見物は菊五郎を支持したのでありますが、それは居殘りの江戸つ子か、下層階級に多いだけで、數字からいつても、勢力からいつても團十郎の傾倒する御歷々には叶ひません。そこで菊五郎の興行價値は團十郎に劣り、隨つて劇場から團十郎ほどの給新は拂はぬといふ結果となつたのであります。

これは本當か嘘か、保證は出來ないが、菊五郎自身で次ぎのやうな愚痴をいつたといふ噂があります。

「何うせ堀越より取り高の少いのは仕方がないが、それにしても餘り違ひ過ぎる」

俳優の給金は秘密にするのが昔からの習慣で、隨つて團十郎の所得を菊五郎が知る筈はありません。その點がらいへば右の咄は作り事かも分りませんが、それにしても菊五郎にそういふ氣持があつた事だけは事實だらうと思ひます。給金ば

かりでなく、すべての待遇が團十郎よりは薄いのと、それについて座主の守田勘彌に對する不平が勃發して、終に明治十八年の新富座脱退となり、暫く千歳座へ劃據したのでありまして。それから次ぎの歌舞伎座時代となつては、改良派の福地櫻痴が團十郎と結托して居たので、いよ〳〵菊五郎の繼子扱ひにされました。晩年になつて團十郎との反情が復活すると同時に、兩優共同の歌舞伎保存の工作が行はれてから、彼れの名聲はズツと大きくなりました。

もし、あのまゝ團菊が老朽しないで今日まで生存して居たら何んなものであらう。わたしは能くそれを考へます。見物の觀劇眼が變つた今日では、人間らしい凡人に扮した菊五郎の方に人氣が高まつて、人間らしくない英雄に扮した團十郎がそれだけ値引きされては居ないでしようか。さうでなくても尠くとも、菊五郎がもつと高く評價されて居るだらうと思ひます。生前に實質以下に評價されて居たは、如何にも故人に對して氣の毒でありますが、その代りに今の六代目が、やはり豪傑でない凡人に扮して、あれだけ恐ろしい人氣を博して居ます。つまり人間の考へ方が違つたのでありますが、佛家のいはゆる、因果應報の道理をこゝに認めることが出來ます。

五世菊五郎逸話集

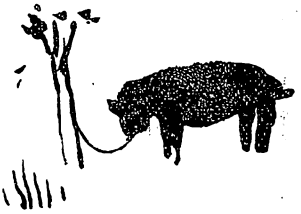
片膚脱ぎのお酌

或る時新富町の宅に遊人が來て「子供に着せるものがないから何うか金を呉れ」と云ふので、菊五郎は懇々と說諭しつ後幸坊(六代目)の着古しを出してやつた。すると「こんな立派なものは我々の子供には着せられネー」と辭退するので、「お前はそう智慧がないから貧棒ばかりするのだ、これを質へ入れるなり賣るなりしてお前の子供相應なものを古着で買へば二三枚は買へるだろう」と云ふと、さすがの遊人も涙を流して泣き出したので、アツケにとられた五代目、でも見かれて「オイ、いゝ遊人がそうメソ〳〵泣く奴があるか、己れも呑むから一杯呑んで行きネー」と盃をさすと、「有難う御座います」を百萬遍も繰り返してお辭儀ばかりしてゐる。「そうお辭儀ばかりしては面白くネー、友人のつもりで呑み合はふ」と云ふと、「へーそれぢやアわつしがお酌を致しませう」と片膚を脱いでしまつた、又々呆氣にとられた菊五郎を前にして「是でも朝湯に入りましたから、こんな汚ネー着物より此方の方が却つて清淨で御座います」と云つたので、五代目ポンとひざを打つて、これは舞臺の役に立つと大喜こびをしたと云ふことだ。

五代目六代目

入江來布

團菊と稱へられしが若葉かな
團菊の菊をおもひの若葉かな
五世六世靑葉大江戸髣髴と
紅白牡丹口上に奕々たり
牡丹花に人氣は立てり六代目
五月鯉六代目とて立てにけり
松王にさこそ俤皐月かな
重ね扇靑葉若葉を重ねけり
重ね扇五月芝居の紋所
重ね扇謳ひつれたる若葉かな
このひとの累ね靑葉のまぼろしに



子を透し觀る

津村京村

團菊左が日本の歌舞伎劇黄金時代を形成した時代から一歩遲れて、劇作に關心を持つ樣になつた私は、當然、五世菊五郎に對して、何等語るにふさはしい資格を持ち合はしてゐるわけでは無く、從つて今回「道頓堀」編輯部から「五世尾上菊五郎に就いて」何か書けといふ御下命に對しても、先づ御辭退いたすべきが當然であつたのだが、それにも不拘「何かお書きしませう」と、臆面も無くお引受けした理由は、元來私は二長町時代の六代目に可なり深い馴染みと親しみを持つてゐた一人で、常にその至藝に感心しては、

「子供でさへこれだけ演れるんだ。而もこの子を生み出した親の五代目はどんなに上手かつたらう！」——と、よくそんな風に子を透して觀た親の藝を想ぐ像し追慕したものだつた。

然ういふ氣持から、私はよく五代目の素顔又は舞臺の寫眞を集めたものだ。そして、あの何んとなく雄大な、それでゐて何處かに細かい藝を想はせるデリカシイの漂つた顏を眺めては、蕩然として有りし日の彼が藝風を追慕したもの

五世菊五郎逸話集

五世菊五郎の土蜘口上

五代目菊五郎が明治十四年六月、新富座で、祖父三代目菊五郎の卅三回忌追善に、土蜘を中幕に据えて上演してゐる、此度の五代目卅三忌追善興行と興味ある對照である、左に當時の口上書を掲げて見る。

——乍憚口上——

御區中樣益々御機嫌克被遊御座恐悦至極に奉存知候隨而私祖父三代目菊五郎儀當年卅三回忌相當に附き何かなお慰みに相成候追善狂言可相勤と重立候作者打ち寄り相談致し候折柄去る芝居座顏見世に曾祖尾上松綠葛城山の土蜘蛛の精を相勤め古今稀なる大入をなしたり。近くは三代目菊五郎弘化乙巳年中村座顏見世に同じく土蜘蛛の精を勤め其頃大評判を取りたり。斯く二代迄相勤めし事故今般追善に土蜘蛛を相勤め候樣難有御差圖に預かり候得其中々未熟の業に難爲候故達而御辭退仕候を再應の御すゝめ難默止則ち仰せにまかせ長唄囃子連中にて所作事を取組奉

であつた。

五代目が、その後繼者たる故梅幸や、今の菊五郎に對する藝を仕込む場合ひの鞭を、如何に强く打ち振つたかは、いろ〳〵な機會に、多くの先輩諸氏から語り聞かされてはゐるが、それらの事實と、あのゆつたりとした顏容とを想ひ合はせると、一寸不思議な氣持がするのは、果して私だけの感じであるだらうか。然し、又よく考へると、或ひは其處に所謂名人らしい一つの渾然たる人格が形造られてゐる所以のものであるのかも知れない。

私は又よく斯ういふ事を考へる。故梅幸と、今の菊五郎の藝をつゝくるんで以つて一丸としたものが即ち先代菊五郎そのものゝ藝ではあるまいか——と。これは必ずしも二人が、その親の子であるから、考へ出した事ではない。梅幸と六代目の二つの至藝を相當多く眺め來たつた私の眼がその視野の彼方に當つて、時々然ういふ事を思ひ描き、しみ〳〵と考へて見た事實があるのである。

故梅幸と今の菊五郎のいづれを取つても、すでに立派な至藝の一つである事はいふまでもない。而もその二つを打つて一丸とし、內容と外形が渾然融合したものが存在するとしたら、それは果してどんなものであるだらう。五代目尾上菊五郎の存在は、即ちそれではなかつたらうか。

私はよく然ういふ事を考へるのである。

入御覽候間何卒御贔負を以て祖父へ追善と思し召れ評判よろしく御見物に御來車の程偏に奉希上候

以上

五代目尾上菊五郎

喜劇の飜譯物上場

五代目尾上菊五郎がおそらく先鞭を打つたであらう飜譯喜劇が、明治十二年二月新富座で二番目に「人間萬事金世中」と云ふザンギリ物で上演された。次のそのツノガキを記してみると、

第二番目は英國の名譽學者リットン筆をふるひ、レモニーの演劇大意は人の交りは兎角に金へ目をつけて浮薄に流れる人情を穿ち盡せし西洋の狂言、趣向も深き池の端、名におふ福地先生が飜譯なしておはなしありしを及ばぬ筆に橫濱へ寫す仕組も春の夜の朧に筋も波止場の月影まとまり兼ねしをやう〳〵に綴り上げしは此演劇、外へとられぬ其うちにと座主も作者も慾が先きだつ新狂言。

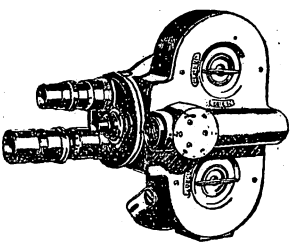
とあつて趣向も深き池の端とは其頃櫻痴居士が下谷池の端に住居されたによるもの、五代目の憲府林之助を初め仲藏の邊見勢左衛門、小團次の娘お品等共に非常な評判であつた。

五代目菊五郎斷章

濱村米藏

伊原青々園氏が『安く評價された菊五郎』といふ題目の下に、明治の新風潮に適應した團十郎は有利な立場に置かれ、その反對の菊五郎は實際以下に評價せられた、といふ意味のことを述べてゐる。

氏の意見の要領を、もう少し詳しく紹介すると、當時劇場に新しく入り込んで、見物の主力を作つた地方出の人々には、活歴芝居の加藤清正、や大石良雄に扮する團十郎は能く分るけれど、あり來りの世話狂言の鼠小僧や多少の新味はあつてもザンギリ物の『筆屋幸兵衛』等の菊五郎には、あまり同情を持てなかつた。その結果が、劇場内部の待遇でも、團十郎と菊五郎とでは、かなりの差違を齎らすやうになつたと言ふのである。そこで更に氏は、その文章の終りに於て、――團菊が老朽しないで今日まで生存して居たら何んなものであらうわたしは能くそれを考へます。見物の觀劇眼が變つた今日では、人間らしい凡人に扮した菊五郎の方に人氣が高まつて、人間らしくない英雄に扮した團十郎



(全國一流カメラ店あに進呈グロタカリ)

BELL & HOWELL CO. U. S. A

フィルモ

十六ミリ界の最高峰

未だ曾てフイルモカメラで影して失敗があつたか？

未だ曾てフイルモカメラで一呎のフイルムが浪費されたか？フイルモは映畫になると同時に最も優秀なるカメラマンを兼ねボタンを押し給へ貴下のなされる事は唯それだけだ

がそれだけ値引されては居ないでしようか。さうでなくても尠くとも、菊五郎がもつと高く評價されてゐるだらうと思ひます。」とかう言つてゐられる。

これは、今日までの團菊比較論に、私の知つてゐる限りでは、曾て見られなかつた解釋を與へるものである。さうして實にしかと金的を射てゐる言葉だと思ふ。

尤もこの伊原氏の解釋は、新しい眞理を發見したのでも何んでもない。さう注意されて見れば、とうに氣付いてゐていゝ筈の分り切つたことである。人間に運不運がある。その多くはこれである。そんな自明の理にうつかりしてゐるのは、即ち燈臺下暗しの譬ひに洩れない。

しかし、これが普通の人間のことならば、七轉八起で不運な男に運の向いて來る時があり、死んだあとでも眞價のはつきりする時もあらうといふものである。けれど、幸か不幸か、才能ある俳優であるが爲に一代の人氣者であつた菊五郎のやうな場合は、さうは簡單に行かないやうに考へられるのである。

——俳優藝術は偏に現在に生きるものであるから、それが時代に適應するかしないかは、彼の才能の長短を分ち生命をさへ決定するものである。が、五代目のやうに相當時代に適應することを知り、それを努めてゐてもなほ、その非凡な本領藝風が、より多く過去の傳統のうちにあつた者を批判するには、右のやうな解釋を用意することが、卓越せる演劇批評家に求めらるべき當然の義務なり責任でなければならない。俳優の生命は、傑れた劇評家のば葉にのみ甦るものであるから、この際、特言伊原氏の意見を紹介する所以である。

五世菊五郎逸話集

土蜘蛛上演の苦心

明治十四年の新富座で常から凝り性の五代目菊五郎が、祖父の追善に名を假りて成田屋の勸進帳を向ふを張る物を拵え上げやうと云ふので前から默阿彌、節曲の正次郎、振り附けの壽輔などを集めて日夜相談した結果、能狂言の土蜘蛛を演ることになつた。然しあの千筋の糸を繰り出すところか能でも傳授ものとなつて居ると云ふので、是非能役者の傳授が得たいといふことに成つた、其當時芝公園の紅葉館脇に能樂堂があつたので、そこで五番能の催があり其の日は金剛唯一が切兼曾我を勸めるのであるが、其の切りに土蜘蛛を所望して研究してはと勸める者があつたので、それは幸と云ふので、その頃歌舞伎新報の主幹をして居た久保田彦作氏（時事新報創刊當時は一編輯員であつた）に其手續きを相談に

「新古演劇十種」解說

西尾福三郎

十八番と云へば芝居を知ると知らぬに拘らずおはこ藝の別名である事は誰でも辨へてゐる。然し歌舞伎十八番は一體何と何とであるかと問はれたら、その道の專門家でも一寸やそつとで答へられないかも知れない。市川家のおはこ十八番に對して、俺んちのおはこはこれだけぞいと並べたのが尾上家の新古演劇十種である。十種とは遠慮したものだが、それも實は先代菊五郎の時には九種まで揃へただけである。十八番に對してその半數だけで遠慮した譯ではない。前者が御先祖代々から讓りうけたものであるが、これは五代目の世になつて始めて選定したものだからである。なあに俺だつて十八番は愚か二十番だつて三十番だつて拵へてみせるぞ、と云つた意氣は先代にも當代にもあるに違ひない所でその十種を簡單に解說してみると

◎土蜘蛛

及んだところ、同氏も日頃能役者が舊弊を守つて尊大に構へて俳優を河原者視するのであるから、菊五郎が土蜘蛛を演ずるからと頼んで行けばきつと斷はられるに極つて居る某貴顯に事情を打ち明けて、此人が催し主となつて同家の執事が調印した屆け書を持つて賓生九郎へ申込んだので別段異議もなく其趣きを金剛へ通じた、金剛は衣裳作り物まで手當して當日は待つてゐた。

然るにその日になつて賓生及觀生清孝から故障を云ひ出した。

それは河原者の俳優などに望まれて之に應じたとあつては世間への聞えもあしく殊に我々の估券が落ちると云ふので某貴顯も困じ果てた、そして再び全く自分の所望だから是非共土蜘蛛を演じて貰ひ度いと嚴命的に申込んだので溢々乍ら引き受けると云ふことになつた、然るに當日囃子方に急病人をこしらへ立消えにさせるべく策略した。

藝道熱心と負けず嫌ひの菊五郎は如何にも心外に思つて再び前記貴顯に運動を繼續してそれより二日を得た六月七日芝公園内の最勝院の座敷で金剛唯一が演ずる事となつた。菊五郎は振付の花物、節付けの正次郎と共に金

今度の演し物になつてゐるこれは、矢張り先代の時にも三代目梅壽菊五郎の三十三回忌追善用として古人の當り藝だつたそれを十八番の勸進帳並に松羽目物として默阿彌が書き直したもので、御覽の通り宿直嘶の蜘蛛から脱してお能の土蜘蛛として品のよいお芝居になつてゐる。

◎茨木

お能に茨木と云ふのはないが、これは土蜘蛛の續編みたいなものである。長唄の綱館を借用したもので、十種の内には入つてゐないが菊五郎得意の船辨慶と共に、音羽家畑の松羽目物三福對として以上の三つを擧げる事ができる。

◎戻り橋

これも筋立は前記二者と共通したもので謂はゞ茨木の前狂言のやうなものである。地は常盤津になつてゐて凝り屋の先代が舞臺に嘘があつてはならないと云ふ所からわざわざ人を介して京の一條戻り橋の橋桁を勘定させてその通りの裝置で上演したと云ふ逸話が傳はつてゐる。

◎一つ家

淺草觀世音の由來記で、淺茅原

剛の土蜘蛛を一擧手一動、目も放たず熟覽してゐたが、終演後互ひに打ち解けて藝事を語り合ふ内にも、聞き上手の彼は土蜘蛛秘傳の千筋の絲を繰り出す呼吸一切を金剛老人から手を取つて敎へられた。此蜘蛛の前シテ沙門頭巾も初めは金剛流に依り、又隅取りなども金剛流の面から工夫したものだと云はれてゐる。

藝術を尊ぶ

菊五郎は禮儀も正しい人であつたが常に同輩に對しても禮をかゝない人であつた。かつて或る人の話に、「これから芝居を見物に行くから一緒に行かうと」勸めるので、明治座へ出かけたことがある、丁度先代左團次、權十郎、壽美藏などの一座ど狂言は一番目「神靈矢口渡」の通しに二番目「三千兩寶和歌山」であつて、殊に一番目は由良兵庫の物語りと矢口の頓兵衛が左團次の出し物であつた。

無論此時分のお芝居は茣盆、辨當、壽司なども棧敷へ持込む例であつたが、菊五郎と云ふ人は開幕中は茣も喫まず又菓子も食はず默つて見て居た。さすがに神聖な藝術に對して茣を喫んだり物を食つたりしないのは、藝術

石の枕の物語りである。前立が暗いのでこれを夢と云ふ事にして、最後は觀音樣の寶前で繪馬を見乍ら眠つてゐたと云ふ明るい返しがついてゐる。地は竹本である。

以上の五つはこゝ十數年の間に京阪の場劇で、梅幸や菊五郎によつて上演された記錄のあるものである。

◎羽衣

これも謠曲から取材したもので現に三月の中座で扇雀が天人で演じたあれであるから今更ら說明にも及ばないだらう。

◎菊慈童

同じく謠曲の菊水慈童から來てゐて、類型のものに枕慈童がある

◎古寺の猫

例の岡崎の猫化けで、昨年河內家が中座で演したものゝ元本である。あの時我童のやつた五占原と云ふ武者修業の隱し持つた名鏡に照されて正躰を顯し飛び去ると云つた筋であるが、後には獵師繁藏の鐵砲で殺されると云ふ筋になり猫と繁藏の二役早變りをやつてゐる。

◎羅漢

これは四月の東京歌舞伎座で歌

を尊重すると同時に、同輩に對しての禮の守る人だと感服させられたと話して居たといふ。

貧棒をした菊五郎

羽左衛門から五代目菊五郎になつた當時のことであるが、市村座も借金で首も廻らぬところから、弟の行松を家橘に直して、市村座の樽をつがせ、自分は菊五郎を襲名する位であるからふところ工合の惡いどん底の暮であつた、ところが門弟からは給金を借りに來られるし、これも無下に斷はるわけにはゆかずせめてこの半分でも持たせて歸すと云ふしまつであつた。さすがの彼も大晦日の夜になると妻女のふところにはもの一文もない、然し家則だけのことはしないでは五代目菊五郎の名にかゝはると云ふので妻君の夏冬の衣類、持物全部を門弟の音五郎に背負はせて、金龍山下の質屋へ持ち込んで翌日の御地馳の手配から、男衆、表方、樂屋、茶屋その他の者の祝儀、又は五代目が着る黑の紋付、袴、たばこ入、足袋、下駄に至るまでとゞこほりのないようにそろへた、その時の苦しさは並大抵ではなかつたそうだ。こうして名優菊五郎が世に生れたわけである。

右衛門が演してゐる。鐵鉢から金の龍を飛出させる所が評判だつたと云ふ。羅漢實は赤松滿祐の靈と云ふ事になつてゐるが、後には前記岡崎の筋を引いて、羅漢は猫のお化けだつたと云ふ事になり、それが更らに夢と云ふ事になり、とゞんまりがあつて最後に變つた引抜きで行つたと云ふ事である。

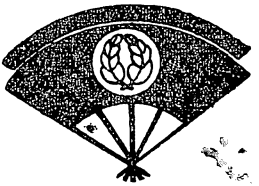
◎小坂部

同じく三月の東京で追善劇に出てゐる。例の講釋種でお馴染の宮本武藏姫路城天主の妖怪退治である。十二單衣の小阪部姫の凄味が見せ所で至極簡單なもの。

以上が五代目選ぶ所の新古演劇十種の内の九種で、後は六代目菊五郎が昨年當座で演した身替座禪で、殘る一つは親への手向けと云ふ意味でか、これは當代に到つて新に追加したものである。

市川家の十八番は名のみ殘つて今では見る術のないものもあるが尾上家の十種は何れも梅幸や菊五郎の手によつて先代歿後に再演されてゐる。

右によつても分る通り、先代はお上品な高尚好みの一面、グロな變化物が得意であつた事が知れる然しそれにも增して尤も五代目の特色を見せたのは自然な市井の雜事に取材した世話物の世界であつた。それを委しく說くには紙數が許さないから、今回は音羽家の表藝たる新古演劇十種だけを驅足で說く事にした。



菊五郎系譜

紙魚庵

初代尾上菊五郎

享保二年京都宮川町音羽屋半平の子に生れ幼名を竹太郎と云ひ、若女形尾上左門の門に入つて菊五郎を名乘る。享保十五年十一月京都龜屋座へ若衆方として出勤。元文頃より女形を努む。寛保元年十一月江戸より入洛の二代目團十郎と一座し、團十郎の鳴神に雲絶間姫を演じて大當りを取り、團十郎に認められて寛保二年十一月江戸へ下り市村座へ團十郎と顔合せで出勤し「葛の葉」をお目見得狂言とす。寶暦三年女形より立役に變じ、同八年市村座々頭となる。其後江戸京阪を上下して奮闘せしも天明三年十一月、大阪嵐座で「ひらがな盛衰記」の延壽と重忠を最後の舞臺として、同年十二月晦日死去す。享年六十七歳。當り藝は由良之助・菅丞相・佐野次郎左衛門・戸名瀬等。

二代目尾上菊五郎

初代の寅子にて幼名丑之助。安永五年春京都藤川座にて初舞臺。天

五代目の宣傳上手

皐月の大阪歌舞伎座に於て、五世菊五郎の追善興行をやるに當り、六代目の「かさね」をだすといふ、それに於て想ひ起したのは古名優の宣傳上手である事だ。

今の世は兎角、宣傳第一であり、松竹興行株式會社でも、宣傳部があつて、盛んに宣傳してくれるが、古昔は其麼機關が無かつたので、役者自身が勝手に宣傳せねばならなかつた。古名優が夫れ〳〵種々な方法で宣傳した事は、多くの逸話となつて貽つてゐるが、中にも、音羽屋の家藝で、例の怨靈もの、四谷怪談、三代目の立役早變りは有名であり、四代目も親讓りの達者であつたが、殊に五代目のお岩の亡靈が白張りの提灯から拔け出る。その提灯に就て面白い話がある。

小さな提灯

芝居が初まると、毎日々々、小道具さんが、音羽屋の家から、白張りの提灯を一つさげて、劇場へ通ふ、其提灯が、馬鹿に小さく、どうしても、人間が提灯の中から出るとは思はれない。「オイ見ねえ、五代目が、

明五年十一月大阪角の芝居で二代目菊五郎を襲名。同七年七月十二日三田尻へ旅行中船中にて急死す。享年十九歳。

◆三代目尾上菊五郎

江戸小傳馬町建具屋仙次郎の子にて幼名辰五郎。初代尾上松助の養子となつて新三郎と改め、更に榮三郎と改名し、天明八年十一月市村座にて初舞臺を踏む。文化六年十一月二代目松助を襲ぎ、十一年には梅幸となり、十二年十月に至つて父の師名を襲いて初めて菊五郎の名跡を相續す。技藝は七代目團十郎と技を競ふ程の名優にて、役の範圍も廣汎にわたり、殊に世話狂言を得意となし、養父譲りの妖怪亡靈の早替りも遙かに養父松助を凌駕し、櫻丸・勘平・權太・佐七・お半・政岡・累・お岩・天德等をその當り藝とした。嘉永二年四月廿四日上方より江戸への歸途遠州掛川にて歿す。享年六十六歳。

◆四代目尾上菊五郎

女形にて出生地は大阪。初め中村歌六の門人となつて歌蝶と云ひ、天保二年正月三代目來阪の砌その技倆を認められ、三代目の娘の婿となり尾上菊枝と改む。同年八月江戸へ下り尾上榮三郎となり、更に弘化三年正月尾上梅幸と改名。安政二年九月に至つて四代目菊五郎を襲名す。八代目團十郎の女房役として活躍す。當り藝は、政岡・重の井・戸名瀬・千代・尾上・お富等

あの提灯から出るんだとさ、へえ、あんな小さな提灯からどうして出られるんだらう？』といふ好奇心から其芝居を觀に行くと、何しろ大きな舞臺であるし、なるほど、提灯がいかにも小さく見へる。それが評判となり、噂に噂を生んで、多勢の人が、毎日々々、小道具さんのさげて行く提灯を見に行くので大當りとなつた。

さて、今度六代目の『だしもの』は、同じ怨靈場でも、四谷怪談よりは、色氣の多い、『かさね』であり、僕は東京で二回觀た事がある。その一は、所謂恪氣の下藥といふやつで、その二は『色彩間刈豆』故守田勘彌君の、與右衛門に、六代目の累、花道へ現はれぬ前から、音羽屋アヽヽヽといふ盛んな懸け聲である。

七三のところで振り返つて、靜乎見物の方をみた型の美しさ、繪のしなやかさ厚化粧のぶつてりとした、いゝ娘つぷり、今度の大阪では、羽左衛門氏の與右衛門との事だが、定めて近來にない大芝居だらう、一日も早く見たいものだ。（了）

大澤休象

◈ 五代目尾上菊五郎

十二代目市村羽左衛門の次男にて弘化元年六月四日出生、幼名九郎右衛門。嘉永二年四月初舞臺。同年正月十三代目羽左衛門をつぎ、文久三年二月父の假名家橘を襲いで藝名となし、更に明治元年八月五代目菊五郎を相續す。以來年と共に名聲を高め、遂に九代目團十郎と共に明治劇壇の巨星と稱せらるゝに至る。殊に世話狂言は四代目市川小團次の影響を受けて天下古今獨歩の技倆を發揮し、當り藝も枚擧に遑あらず。辨大・髮結・五郎藏・次郎吉・直侍・宗五郎等。又所作事にも秀で、土蜘蛛・戻橋・操三番等、何れも名舞臺として擧げ得る逸品である。明治三十六年二月十八日歿、享年六十歳。

◈ 六代目尾上菊五郎

五代目の實子にて明治十八年八月二十六日出生、幼名丑之助。明治十九年五月千歳座にて初舞臺。同三十六年三月父の死後、歌舞伎座にて對面の五郎を務め六代目菊五郎を襲名す。藝風は、世話物には父の長所を汲み、またよく團十郎の薫陶を受けて、所作事と腹藝に一頭地を抜き、昭和劇壇の名優として光彩を放つ。

右日本百科事典・菊五郎の代々に據る

五世菊五郎逸話集

助六の頓智

明治三年の三月五代目が中村座から森田座へ掛けもちをした時、座主の勘彌が市川家十八番の助六を彼にやらせうとした、菊五郎も成田屋の向ふを張つて演つて見やうかと云ふ氣になつたが、意休の役は是非成駒屋へやつてもらひ度いと申込んだ、成駒屋芝翫は今賣出し中なので、その母親が、若輩の菊五郎に下駄を頭にのせられるやうな芝居はやらせられないと苦情を申立てた。そこで菊五郎は早速成駒屋へ出かけて如才なく門口から「ヤー伯母さん、どうしたえ」と云ふ調子でとう〳〵母親をときふせ「私だつて、まさか兄貴の頭へ下駄は乘せもしまいから、まあだまつて初日を見てお呉れよ」と云つて歸つて來た、それから狂言作者の河竹其水（默阿彌）へ相談をかけて、うまくせりふを仕組んだのである。その時の臺詞がこうである。

五代目の助六が駒下駄を持つて立かゝると女達が「助六さん其駒下駄を何うしやんすぞへ」

助六「何うするもんかお定りなら、意休の頭へ載せるのだが、併し己れが載せたら、御贔多い成駒屋、ふだん兄貴とたてる仲、コイツア役でも載せられへわえ」と駒下駄をほふり出した。これが素敵な人氣になつたと云ふ。

五世菊五郎逸話集

五代目は他人の間違に對しても注意をおこたらなかつた。こんな事がある、兩國のモヽンジー屋（豊田屋といふ猪屋のこと）へ猪を買ひにやつたことがある。

「いくら買ひませう、二人で召上るのだから二圓も持たせて遣つたらいゝでせう」と云ふと五代目は納まらない。

「モヽンジーなど食ふ者が二圓など云つてはいけない、モヽンジーを二兩奥ンネー」、とこう云ふのだと云つたと云ふ、面白い話だ。

★

煙管の持ち方一つにも研究が行きとゞいてゐたのは世話物師としての優の餘りに有名な話だ。大名、武家町人、百姓、と云ふ工合にいろ〳〵違ふ、同じ町人でも役の性根によつて天下を望むと云ふ樣な人物の場合は殿樣式に持つて、どことなく大さを現はすと云ふ樣に細心の注意をはらして居たのである。

これに供なふ。煙管、煙草入の蒐集もたくさんあつたと云ふ。

關西唯一の演劇雜誌

堀　頓　道

月極讀者 **大募集**

—一ケ年　三圓三十錢—

申込所　大阪市南區難新地三

松竹興行大阪支店內

道頓堀編輯部

五世菊五郎まんが追善

勘平

妹脊 平三

あつしの三十三回忌だ、早えもんだ、時世が變れば勘平が青年團服姿で猪でも連れて花道から現れるだらうと思つてたが、やつぱり昔の儘にのこつてたアうれしいねェ ←

天笠德兵衛

秋田しういち

恐ろしい不吉な繪馬を見た
曰く
『巳ノ年巳ノ月生れの女』

五世菊五郎逸話集

め組の喧嘩

人も知る凝性であつた五世菊五郎、「神惠和合取組」―め組の喧嘩―が上演される時も種々と苦心をしたものである、それは鳶方も又相模方も何等が負けても恨まれると云ふので、默阿彌が筋を立てた時も序幕の喧嘩と云ひ、二幕目の神明境内芝居前の喧嘩と云ひ大詰まで何等も負け勝ち無しに納めると云ふ事にしたのは菊五郎の思ひ附きで、一座の左團次、芝翫とも顏を合せる樣にし、又、外題も「神惠」とめ組を利かせ、それに外題の中に仲直りを利かせたのか「和合」と云ふ文字を用ひ、末に「取組」で相模を利かせたなどは五代目菊五郎の考であるといふ。

張子の瓦

矢張り此時の大詰で、鳶方の役者は一同屋根に駈け上つて角力めがけて瓦を投げ附けたが、初日當時は瓦が木製であつた爲め、芝翫（先代）の四ッ車の額へ當つて疵を拵えたので、急に小道具の藤浪を呼んで、芯をボール

ジーペのがんま

文明と茨木

大槻たもつ

網「ヤイッチャンと兩手を持ちながら、その腕、貴樣のものとは？。」

鬼「へ……御覽の通り片手は、義手だヨ。」

宣傳王いがみの權太

大槻たもつ

權「アイヤお立會、御覽の通り當家自慢の彌助ずし。大和の楠公史蹟巡りのピクニックには是非お辨當に。」

紙にして是へ綿を着せ、其分へ鼠色の木綿を冠せたが座元の勘彌はそれを知らずにゐると中日になつて此瓦の代金の莫大な請求をされたので勘彌は非常に怒つて菊五郎に捻ぢ込んだ、菊五郎曰く、勘彌さん、そんなら役者は怪我をしても宜いのか、命までも賣つてゐないよ、殊に役者は顔は賣り物だ。それに何程瓦料に金がかゝつても、それ以上見物をよべば損はあるまいとの一言に、さすがの勘彌も返す言葉がなかつたといふことである。

階子乘り

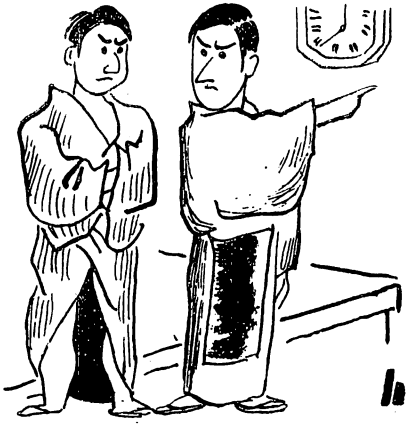
これもその當時多分明治三十四年の歌舞伎座一月興行の事である。大切り淨瑠璃に階子乘りが出た事がある。それは出初め式を當て込んでの出し物でるつたが、例の凝り性を發揮して、先年物故した三津五郎の妻女の父親(俗に本郷町の頭)が友達であつたので、此人に就て階子乘りの數々を稽古して貰ひ、それを舞臺で實地に演じやうと苦心したがどうもあぶなくて、腹龜だの吹流し、逆さ大の字などが出來ないので種々考へた結果小道具の藤浪を密かに自宅へ招いて階子に仕掛けを考案して貰ひ本職の鳶連中をあつと云はせて大評判をとつたといふ。(その仕掛は商賣の秘密

ジーペのがんま

明石の島藏

妹脊　平三

「時計の八時を合圖」に舞臺に時計を使つたり、ザンギリ頭の大ハイカラも今から見ればホンのお笑ひ草さ、だが、あつしはこれでも舞臺で輕氣球に乘つたかられエ



貢君の失戀

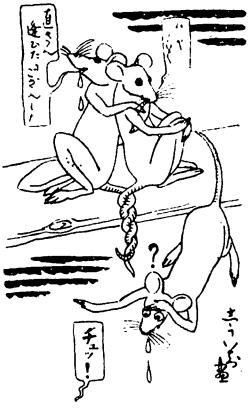
大槻たもつ

お紺さんに四十サンチ肱鐵を喰つた貢君、猛然、羽織を脱げば、白羽二重の裏に墨痕淋漓。「僕は滿洲へ行く。」

だからか種明しは遠慮する）

花牌を止める

菊五郎が腦溢血の爲に半身不隨となつて舞臺を退いてからは、逢ふ人毎に「何とだらう己れの身體は癒るかしら」と口癖のやうに云つてゐた、其頃常に菊五郎の家へ出入りして居た親戚の富貴樓のお倉さん（延壽太夫の實母）が見兼ねて、さう身體の事ばかり氣にしないで、偶にはお花牌でも引いたら少しは氣が紛れる事もあらうと、强て勸めたが、優はどうしてもそれに應じなかつた。そして「己れも若い時分は隨分花牌も形いたり、又博奕も打つて、丁や狐で夜明しをした事もあるが五代目菊五郎と名乘つて座頭の地置に坐つてからはプツツリと止めて終つたのだ、それは勝負になると旦那衆計りを相手にするわけには行かず、終ひには下廻り等とも勝負を爭ふ事になり、若し花牌の引き方でも悪ければこん畜生とか又は此間拔けメとか、何とは云はなくても宜いことも云はれたりする上に、平常一文二文を爭つて居れば肝腎な舞臺へ出た時はそれ等の者に小言も云はれず、お上にでも知れたら五代目菊九郎の名に泥を塗るやうなものであるから、あれ程富貴樓がすゝめて



直侍　秋田志ういち

入谷村大口屋寮天井裏之場
鼠共大異變とござい！

辨天小僧　秋田志ういち

流石メイ優ですかづらの落ちた事位ひには動じませんがツルリ頭だけは女達に見せたくはないらしい
辨天小僧の菊……ゴロウだ！

髪結新三　妹脊　平三

家主長兵衛が「鰹は半分もらつてくぜ！」のあの初鰹なんてものは今のモダンには分るめえ！
髪結が理髪師になつても鰹でなけや芝居にならねえからねェ

も花牌は引かないのだ」と語つて居たと云ふことだ。

幻燈の應用

これは明治二十一年磐梯山の大噴火があつたのを當て込んで、鳥越中村座の「音聞淺間幻燈畫」で優は道中師伊豆屋初藏をやり、噴火につぶれた藁家の中から江戸より詫された娘を救出すと云ふ筋だが、そこで優は何か新機軸を出すべく、實地を見聞した田中智學氏に就いて、非常に寫實な舞臺を作り後の背景に炎々と立ちのぼる炎に幻燈を用ひて大した効果を現はして人氣を呼んだと云ふ。

制吒迦童子の拵

何事によらず、いゝかげんで物をやつちまふ事がきらひな優は、團十郎と顔合せで制吒迦童子をやつた時その拵えで制吒迦童子の腰へ卷いてある物と兩の肩へかけた風呂敷のやうな金襴のキレは一體何であるかと或る佛師に就いて調べさせて見た、そして腰に着けたのは裙と云つて天竺（印度）の人が腰に卷いてゐる更紗を美化したもの、肩にかけてゐるのは袈裟を丸めて首にかけてゐるのだと分つた。こうして充分自分で得心が行くまで調べなければ舞臺へかけることをしなかつた。

六代目の舞踊

中田蝶二

修養はもとより大切だが、天分の備はつてゐるに越したことはない。殊に藝術家の場合に於てさうである。

修養を怠らず向上の一路に精進する人は、たしかに藝の上手達人にはなれる。併し、名人になれるか何うかは疑問である。

天分があつて、その上に、正しい道への修養を怠らない人にして、初めて名人の域に達することが出來やうと云ふものだ。

六代目尾上菊五郎の舞踊のうまさは、天分と修養とを兼ね合はせた名人肌のうまさである。

すつと昔の市村座時代以來、彼はよく三津五郎とつながつて踊つた。さうして、多くの見物の中には、『三津五郎の方が踊が整つてゐる』。と云ふものと、『菊五郎の踊の方が面白い』。と云ふものと、殆んど伯中して兩々相下らなかつたものだ。この整うてゐると云ふこと。

面白く踊ると云ふこと。

これは頗る味はふべき言葉であらねばならぬ。

手振り、足どり、體の動作、曲線美と直線美とが整うて居れば、踊としては立派なものだと云へる。三津五郎は踊家として、當代の第一人者であることを敢て拒むものではない。けれども、此優の舞踊は、舞踊家としての踊であつて、惜しいかな、歌舞伎の芝居としての踊にはなりきつてゐない。それが菊五郎と並んで淋しい所以である。

菊五郎の踊の面白いと云はれた所以は、その踊を歌舞伎の形式へうまく嵌めこんで行くことを忘れなかつた結果ではあるまいか。

それに、今一とつ大切なことがある。

菊五郎は單に形式にのみ囚はれるのではなくて、この踊つ

てゐる役の人物になりきると云ふこと、即ち、魂を吹き込むと云ふことを市村座時代から研究して怠らなかつた。それが、今日の大をなさしめた基である。

怎うして、彼は天分を備へてゐる上に、修養に於ても、進むべき目標をあやまらなかつた。さうして、單なる踊のお浚への舞臺の踊ではなく、歌舞伎芝居の舞踊としての大をなしつゝある所以のもの、思ふに、彼が少年時代を故市川團十郎の薫陶の下に、大歌舞伎俳優として進むべき道を、十分に培はれてゐたことが、興つて最も力があるのではあるまいか。

五世菊五郎逸話集

五代目と云ふ人は自分よがりをしない人だつた。

嘗つて團十郎の光秀に、五代目の信長をやつた折のことである。その時或る人が「寺島さん信長は本能寺で光秀に殺されたのは、たしか四十九の子の歳だと記憶してゐるが、あれでは青黛が青過ぎて餘りに歳年とちがやアしないか、それと云つて四十九の年寄りで演られては肝癪を起して膳を蹴散らしたり、光秀の眉見を蘭丸に打たせたりする事が出來ないから、あれは奥青黛に直してはどうか」と云ふと、五代目は直ぐに研の粉を溶いて顔をぬり次の幕から訂正したと云ふ。

洋酒界の革命兒國産洋酒の逸品

國産金鶴印

ウキスキー
ブランデー
ベルモット
キユーラソー
ベパーミント
ジン
滋養葡萄酒

元賣發
株式會社 横山商店
大阪市東區豐後町三番地
電話東(94)一六六一 二〇一三 四六四九

『羽根の禿』と『うかれ坊主』

川尻清譚

『羽根の禿』の始めは、天明五年正月の桐座に於て、三代目瀬川菊之丞が、二代目菊之丞の追善として、『春昔由縁英』と云ふ狂言名題を据へて、五變化を踊つた事のあづた時『盧生』『羽根の禿』『白酒賣』『女助六』『相生獅子』の五曲の中此『羽根の禿』が最も好評を博したものだそうで、作曲者は初代の杵屋正治郎であるが、續いて天明七年三月の桐座にも岩井半四郎が七變化の所作事の中に、矢張『羽根の禿』を出して、是又大評判を取つた記錄が殘つてゐる。

總じて節附にも振附にも、廓の禿らしい初々しい所が現はれてゐるので、其後は子供の踊の手ほどきに用ひられ、從て踊のお浚ひ等に上演されてはゐたものゝ、舞臺へは餘り多く登らなかつた踊であつたのを、菊五郎が『うかれ坊主』を下の卷に付けて『羽根の禿』を上の卷に組合せて踊つたのが、絶大な賞讃を得た所から、二度も三度も出し物にする得意藝になつた譯で。嘗て長唄の『鷺娘』を團十郎が踊つて以來。誰も彼もが踊るやうになつたのと同じく、其演技の出來榮えが萩群であつた爲に、埋もれた物が改めて世の中へ出て來た事になつたのである。

元來廓の禿と云ふのは、やがて遊女になる下地子であつて見習ひの爲に太夫職の姉女郎の手廻りを働く者で、十二才から十七才位までの奉公をするものである。そこで菊五郎の禿も、此至つて年の少ない仇氣ない所を覗つて、非常に可愛らしく見せるのが一つの山である。尤も菊五郎は頗る健康體な上に、全身が滿々と肥え太つてゐるのであるから、其體を小さく見せるに就ては、女郎屋の暖簾口の道具を大きく飾つて人間を小さくする事の工風も凝してあるとは云へ、決してそ

ればかりの苦勞ではなく、踊りを踊つてゐる全部が、どう見ても十二三にしか見えない所に値打ちがあり、又本人の味噌もあるのである。イヤ全くどうして斯んなにも可愛らしくなれるものかと、先づ第一に暖簾口から顏を出した時に、誰しもが驚かずにはゐられない事は、必ず見物席がザワ〳〵するのを以て證立てられてゐるのである。

最初菊五郎が此『羽根の禿』を勤める時、成べく年の行かない雛妓を大勢呼んで、いろ〳〵踊を踊らせて見て、子供の手振を研究したのも事實であるが、それよりも尙もう一つ、七つになる娘の踊を見て、大に會得する所があつた上に、偉大な藝の力を合せて、遂に此『羽根の禿』を完成させたもので、是を單に道具建を大きくした結果、それで小さく見えるのだと思ふなどは大間違である。即ち全體の振りが悉く禿に成切つてゐて、例へば長い袂で文を卷く仕科。松飾りの上へ留つた羽根を、塗木履を重ねて取る形ち。チン〳〵モガ〳〵で戻るこなし等、等、其一々のどこまでも斷じて子供を離れない妙技は、寧ろ驚異に價するものとして、此踊を見る度毎に深く敬服してゐるのは、敢て自分だけではないと信じるのと共に、今回五代目菊五郎卅三回忌追善興行に際して、大阪に於ける見巧者の方々に、是非とも此踊を一擧手一投足までを、見逃さないやうに賞觀して貰ひたい事を切望するものである。

右『羽根の禿』の舞臺裝置及考證の一切は、小村雪岱畫伯の擔任する所であつて、錦上に一層の光彩を添へてゐるが、東京の舞臺に此踊の上演された時には、菊五郎が舞臺で使用した羽子板の希望者が多く、それが爲に雪岱畫伯は、別に十幾枚の羽子板の繪を畫され、又菊五郎が突いた羽根の貰ひ手が多く、小道具の藤浪は舞臺用の外に、更に數十個の羽根を作り、それを菊五郎が造つた事にして、ひいきの求めに應じたと云ふ、斯んな珍談もあつた位、又其年の暮の市には、此『羽根の禿』の一人立の羽子板が、大した人氣で賣れたものである。

次ぎにお話の序に『うかれ坊主』の事を、少しばかり言つて見れば、此淨瑠璃は三代目坂東三津五郎が、七變化の中に踊つた事のあつたもので、其後先代の中村芝翫、又今の中村歌右衛門がまだ福助時代に、いづれも一度づゝ踊つた事があつた切り打絶えてゐたのを、幸ひ藤間勘十郎の家に、此振りが殘つてゐたので、昭和四年の六月、菊五郎が、東京の歌舞

伎座に復活上演して、是も亦絶大な好評を得たものである。此時から清元の『花の雲助合肩』の一節、即ち『上り夜船の櫂や櫓ぢやとて揖を取つたえ』以下をずつと取入れて、踊も多く振りも面白く工風されてあり、殊に此『うかれ坊主』の特長とする所は、段鹿の子の褌一つ、それに紗の十徳やうのものを一枚着てゐるだけで、跡はいがぐりの鬘を掛けてゐるだけの事、殆んど全裸體で存分に踊りぬくのであつて、言はゞどうにもシガの隠しやうもなし、又形ちも附けにくひのを然も立派に實に輕妙無類に踊りこなして行くのが見ものである。例を擧げて言へば、船頭が竿を突張つてゐる形。又船を曳いて行く形ち。定九郎が與一兵衛から金を取る身振り。蝶々が葭の先きへ留つて羽ばたきをする袖の動かし方。酒に醉つた浮れ拍子。烏の羽根と鳶の羽根との、飛び方の違ふ振り事等。等、森羅萬象を千差萬別して、踊りにならないものは一つもない有様で、つまり踊つて見せやうとする事の一々が此裸體姿の儘、女であれ、男であれ、鳥であれ、獸であれ、悉く見物の頭へ肯かれるやうに入つて來るのが不思議な位骨て成駒屋中村歌太衛門の妻女が此踊を見て、菊五郎さんの踊りは、踊つてゐる事がすつかり分るので實に面白く拜見が出來ます』と言つたのは明言で、全く此『うかれ坊主』の如きは、よくもア、まで思ひの儘に、踊の意味が形ちの上に現はれるものだと、しみ〴〵感心をさせられる程、何度見直しても決して飽きないばかりか、ます〳〵妙所を發見する事の限りないものである。以上あまり提灯持ちが過ぎるやうにも思はれやうがなれども、百聞は一見に如かずである。『羽根の禿』と『うかれ坊主』を見物すれば、私の宣傳が事實を誇長してゐない事が、慥に判然と分るのと同時に、菊五郎の踊が只線ばかりで踊り現はすのではなく、踊の内容を踊り盡くしてゐるものである事が、よく分つて貰へるのは正に受合ひである。

五世菊五郎逸話集

切り出しの月を考案したのも菊五郎であつた。明治十二年の新富座の狂言で横山波止場の道具で海原より空を見た夏劇に月を切りぬかして、これへつやけしガラスをはめ、後からランプで照らし、又は綿を畳でそめ、それを黒にした考案も彼の思ひ付であつた。

その頃では珍らしいのでその月が出るとお向ふでは「ヤーお月様〳〵」とほめたそうである。

六代目へ注文

その可能は兎も角として、文樂座に於てさへ新作を手持けてゐる今日、歌舞伎劇の上演目錄中、最も重要な位置にある院本物が、今日の劇壇には極めて影の薄い不遇な存在になつてゐる。

院本物の俳優としては中村吉右衛門がある。が、吉右衛門の價値は、飽く迄型物の俳優として、その演出法は勿論古典的である。この方法は、當然院本物を正しく傳存する意味に於て必要なもの。

しかし現在の觀客層には、もう一つそれを押し切つた院本物の新しい演出がなければならない。

六代目菊五郎が開拓してゆく一つの分野には、當然この院本物の新演出があると思ふ。

これには、院本物に對する正しい理解があり、同時に新しいものに對する猛ましき氣魄がなければならない。

吉右衛門が院本物を演ずる場合には、屢々「型」といふ以外に、その「內容」さへ極めて古い場合が多い。但し、この場合が多い。但し、この場合の「內容」は、院本の內容といふ意味ではなく、その演出法の內容をいふ事勿論である。これは吉右衛門の欠點であると同時に、型物傳存者としての美點でもある。

が、今日、もう一つ、同じ臺本によつて新しい解釋の院本物演出も必要である。六代目の演ずる「野崎村」のお光を見よ。これは、院本物への新しき復活であり、同時に古典院本物への新しい發展ともいへる。

これをよく爲し得るもの、六代目菊五郎を他に置いては斷じて不可能である。

新作物に、默阿彌物に、舞踊に、行くとして可ならざるなき六代目の仕事は山程ある。

が、私は、今後の歌舞伎劇壇に、最も必要な土臺を築くであらうこの院本物新演出を、六代目の急務として、聲を大にして註文しておきたい。

——了——

中山楠雄

菊五郎の藝術

丸山耕

六代目菊五郎の藝術を、有してゐる現代は幸福である。誰しも、非凡といふ言葉を以てそれを推稱してゐるが、まことに當を得たる讃辭といふべく、まさに同優の演技は、否その巧さは普通一般が到達し得らるゝ藝境を遙に超越してゐる。どうしてこんなに堪熟したものが。天稟の素質ばかりでも、又、特別の

襲名する人々

先代菊五郎の追善興行には四人の有爲な人材が、各々由緒深き名跡を襲名して、梅幸・仁左・鴈と相次いでの他界に淋しくなつた歌舞伎の世界を賑かにする。

◉先づ菊五郎の長男丑之助が菊之助を襲名する。この菊之助と云ふ名跡は丑之助と同じく嗣子に用ひられた名跡で、三代目菊五郎の嗣子に附されたのが最初であり、最近では五代目の倅が菊之動を名乘つて居たが明治三十年に夭逝して久しく打絶えてゐたものを、此の追善興行を機會に復活される譯なのである。

新菊之助の藝風は良き父の薫陶と嚴しい鞭の下に、屈托のない素直な舞臺を見せて呉れる一方、父の補佐役として、シツクりとした落着いた味を見せる。デカ〳〵と目には止らないが、靜かに見つめてゐると好きになれる質である。

◉幸四郎の倅豊は以前から菊五郎に師事してゐたが、これが尾上松緣を名乘つて正式に尾上家の一人に加つた。松緣と云ふ名跡は、初代松助が隱居後に名乘つた名跡で、變化物の名人として知られてゐる人である。この名跡が松本豊に依つて此の度復活されたのである。

修練ばかりでもこゝ迄は行かぬよく、入神の技などゝいふが、神が彼の藝の中へ入り込んで來たのか、彼が神の藝を體得したのか、いづれにせよ、人間業ではない。而もそれは今が止りといふ頂點ではなく、まだ〳〵、どれ程伸びるやら計り知れぬ。思へば素晴らしい名人が出來たもので、無條件に感服するの外はない。實に菊五郎の至藝こそは、天衣無縫の一語に盡きよう。

三月東京で此の人の男之助を見たが押し出し、聲量共に親讓りと立派なところがあつて結構なものだつた。線の太いところなど將來の辨慶役者としても相當刮目出來そうだ。その上に此の人、中々師匠のくせを取入れることに巧みだとの評判だから、幸・菊の兩畑を開拓して行くのではないかとまで思はれる。

⊙彦三郎の伜龜三郎は薪水と改名する。薪水とは代々彦三郎の用ひて來た俳名なのである。薪水は彦三郎の子とは思へぬ程、神經質なタイプをしてゐる。どうみてもモダンボーイと云ふところである。僕は此の人が今後どう云ふ畠に鍬を入れて行くかに興味を持つてゐる。羽左衛門の持役を覗つてゐるのではないかと、フトそんな氣持もするのである。

⊙昭和三年の九月に歿した松助の名跡を、愈々伊三郎が襲ぐことになつた。此の人なら、まんざら異存もない筈である。六代目の世話狂言にはなくてはならない伊三郎であつた。而も近來富みに故松助に髣髴して來ると云ふ。そう云へば臺詞廻しも似て來さうだ。此の人にサビが出て來れば……六代目もキットその時の來ることを樂んで鶴首してゐるに相違あるまい。

今、此の四人が追善の晴れの舞臺で襲名をした。何れも將來を囑望されてゐる新人ばかりである。何うか將來僕達の期待を裏切らないやうに今日の晴れの舞臺を一層晴れあらしめて呉れ給ひ。と衷心から祈る。

大橋孝一郎

入門秘話

―六代目へ師事した章景―

速見正治

昭和八年の六月、十幾年振りかで六代目を迎へた大阪歌舞伎座は、これに未だ元氣の衰へなかつた成駒屋を加へての大一座で、連日文字通りの大入續きの盛況を呈してゐた。その頃の或る一日、六代目の楽屋を訪れた一人の老婦人は關西の名女形故中村雀右衛門の未亡人で、豫ね豫ね人を通じて倅の章景を六代目の門弟に挾し加へて呉れる樣にとの願望を秘かに通じて置いたところ、六代目も、雀右衛門と云へば關西では相當重きをなした女形でもありその息子の章景が若人の心に燃る灼熱の藝道への精進の第一歩を踏み出すべきよき機會を與へてやることにもなる譯だから兎に角一度逢つてみやうと云ふところで話が進んで來たのであつた

『辛いぜ、辛抱出來るかい』

六代目は例の江戸ッ兒式なブッキラボーな言葉で章景の顏を見た。

『ハイ、やります。キットやり通して見せます』

章景の聲はあたかも熱情の迸りの樣であつた。そして幽かに痙攣してゐた

「ジヤア明日から俺の舞つてゐる「鏡獅子」を毎日見てシッカッと覺えるんだ』

『ハイ』

章景は只一言力强く返答して頭を下げた。

その翌日ならの章景は人が違つて終つたのではないかと思はれる程、ジッと六代目の舞臺ばかりに魅入つてゐた。キットやり遂げて見せる……

やがて千秋樂も二三日の後に近づいた或る夜の舞臺もハネてからのことだつた。改めて章景の親子が六代目の前に呼び出された。それは今夜、愈々章景の踊りを六代目が見てやると云ふのであつた。親子の血潮は高鳴りを覺えた。ノルかソルかの瀬戸際だ。父にも勝る名女形になるかならぬかの大切な岐點なのだ。

『「鏡獅子」はもう覺えたかい』

六代目の聲にはリンとした師匠としての風格があつた。

『ハイ』

『ヨシ、じやア俺の前で踊つて見る

んだ』

フンまへてゐる兩足にも自ら力々籠つて行つた。章景は只夢中——夢中になつて舞ひ續けた。そして何時その曲が終つたとも判らぬ程に昂奮してゐた。

『フム、もう一度踊つて見ろ』

二回目だ。前にも增し　緊張した心持ちで……

『もう一度……』

三回目、四回目と反覆される。もうへト〳〵だ。六月の陽氣にたゞでさへ體はビツショリと汗ばむのに、汗は體全體から流れて落ちる。『辛いぜ、辛抱出來るかい……』師匠の言葉が頭裡からよみ返つて來た。此處だ！何くそ、頑張り通すんだ。

『次は裸で踊れ』

素裸で踊るのだ。骨格から仕上げて行く六代目獨特の稽古法である。一しきり素裸の稽古の續いた後で、始めて休息が與へられた。氣が付いて見るともう障子の外は白々と夜が明け離れやうとする時刻にもなつてゐた。その嚴格な稽古の間、母親の氣持はどんなだつたらうか。

『立役か女形かどちらになりたい』

六代目の心からの氣づかひ樣だ。彼は矢張り雀右衛門の名跡を襲ぐべく父以上の名女形になりたい野心に燃えてゐる。

『女形になりたいと思ひます。』

『そうか、では明日から俺の部屋に來てもいゝぜ』

章景はこゝで始めて入門を許された譯である。母子は餘りの嬉しさに涙を流して喜び合つた。お禮の言葉もそこそこに家に歸ると早速この嬉しい報告を亡き父の位牌の前に手向けたのだつたそれから丁度丸二年の星霜がたつた。二月に京都を訪れた六代目は五月は大阪の歌舞伎座で亡父五代目の追善興行の幕を開く。二月に京都で來演した時章景は師匠六代目の厚い心盡しで「高抔」に姫御寮の大役をふり當てられたし、五月の大阪でも矢張り相當な大役を受持つことになると云ふ。みんな故郷へ花を飾らせてやらうと云ふ濃かな師匠の愛情の現れでなくてなんであらうか。

幸ひ二月の章景の舞臺は評判が良かつた。

『エライ變らはりましたなァ……』

僕の側にゐた人々が小聲で語り合つてゐるのを僕は聞き洩さなかつた。然しその言葉の裏にはどれだけの辛い修練の體積が横たはつてゐるかを僕達は知らなければならないのである。僕は將來立派に彼の藝に磨きがかけられて由緒ある關西の名題中村雀古衛門の名跡を襲名される日の一日も早からんことを祈つて、このエピソートの一駒に最後のピリオドを打つことにしやう。

「姿」の役者・羽左

―「かさね」の與右衛門について―

山口廣一

現代における東西俳優を通じて、わが羽左衛門丈ほど優れた「姿」の役者はない。當代隨一の人氣者六代目や吉右衛門の至藝、さては幸四郎、延若、左團次あたりの惠まれた俳優的條件を以つてしても「姿」の點ではたゞスツと立つたゞけで、立派に「繪」になり「藝」になつてゐる羽左には到底かなはない。その上にあの持味の寛潤さ、明朗さ、暢達さがこの姿のよさを一際晴れやかなものにしてゐるんだから、羽左は單に「姿」だけで既に俳優としての九十九點は生れながらにして獲得してゐるといへる。

この「姿」の本領を發揮する羽左の役々のうちでは今度上演される「かさね」の與右衛門がまづ第一に擧げられる。元來「色彩間刈豆」は道行物だし、それにシテのかさねに對して與右衛門はワキだから、終始控え目の芝居が自然と形本位の藝になつて來る。そこに一姿」の與右衛門と「姿」の羽左が渾然と一致する根底がある。與右衛門と羽左、蓋しこれは精巧な二つの齒車の滑らかな回轉を想はせる極上の適り役に違ひない。

今度のかさねは六代目。羽左と六代目は昭和歌舞伎の持つ繪畫美の代表選手だ六代目には羽左のやうな天禀の姿態美はないが、その代り琢磨された舞踊の動作美がある。いはゞ羽左の美は靜の美で、六代目のそれは動の美とも說明出來ようこの對蹠的な二つの美の代表選手が四つに組む今度の「かさね」に至つては正に美の世界賞だ。

羽左の與右衛門の美しさは幕があいて清元の置歌〳〵思ひをも心も人に染まばこそ……おくれ先だつ二道を……がきれると、バタ〳〵で本花郎のかさねに對して假花道から出る姿のよさ――今度は原作尊重でかさねとゝもに本花道かも知れぬが――黑羽二重にクツキリ截斷された襟足の白さ、裾を端折つて菰で包んだ細身の立姿、早くも歌舞伎美の芳醇さがわれら視覺と聽覺を鋭く刺激して一種の劇的興奮に身内が引締る。舞臺へかゝつて、かさねのくどき〳〵ほんに結ぶの神ならで……あたりから〳〵どこやら風が成田屋に……續いて皷唄、岩田帶を見せてのキマリまで、動き續けるかさねに對してじつ

と打ち沈む興右衛門の姿に羽左の靜の美が烈々と內燃してゐる。

髑髏の流れからかさねが顏の拵へをかへるつなぎに捕手を絡ませたゞ夜や更けて……のタテの間、時間にすればわづか七八分あるなしだが、あの羽左の形の鮮やかさはどうだらう！均整のとれた四肢の自由な構成が忽ち見事な繪になり彫塑となつて連續する。自分の體線を鑿にして自分の肉體をあれほどまでに美術的に刻んで行く神技にわれらは限りなき驚きと魅力に追ひ込まれる。

後半ではかさねに鏡を見せるキマリ、土橋の上でかさねと天地になつた形なども壓卷だし、幕切れ引張りの者得まで、初演當時よりは幾分肉體の衰へはあるにしても、一層洗練された圓熟さが十分にそれを補ふことゝ期待される。

元來、この一幕の面白さは視角を變へて見ると、一つには初夏の季感が素晴しい巧みさで舞臺化されてゐる點にあると思ふ。一面の淺黃幕に上手の土橋と柳、下手の草土堤と鍛冶屋、それに夏草と蛇籠をあしらつて螢を飛ばせる。なんと心憎きまで簡素に整つた初夏の季題感ではないか。さらにこの情景に若い浪人と艶麗な御殿女中の色模樣が點綴され、それが一變して凄慘な南北獨壇場の「殺し」になる。數ある夏狂言のうち、かくも妖しい感觸と麗はしい詩味に富んだ舞臺がまたとあらうか。

その上、羽左は萬年若衆振りを發揮し舞臺は勿論日常生活まで常に元氣で爽々しいあの持味は、これを季節に見立てると、死んだ「春の役者」鴈治郎に對して羽左は變な譬へだが潑溂たるところ正に「夏の役者」だといへよう。そこで狂言も夏、役者も夏、そして興行は風薰る新綠五月——今度の歌舞伎座の「かさね」はどつからもテンの打ちどころがない。

繁華街に近く……交通至便●閑雅な和洋室！

モダン階上浴室新設

南地ホテル

南海難波新地戎橋停前

電話 南 四一四●四四一番

一宿 三圓 二圓 一半

額 半 慰

菊畑の話

隨分お古いお話で恐れ入りますけれども此の間さる雜誌に死んだ仁左の藝談が掲載されまして、その中に菊畑の思ひ出が書いてありました。幸ひ今の月は歌舞伎座に立派な菊畑がかゝつて居りますので、その思ひ出話をかひつまんで申上げることに致しませう。何しろ大阪中座で中村宗十郎の鬼一に鴈治郎の智惠内、仁左の虎藏と云ふ顔ぶれで菊畑の上演された時のことですから眞に古いお話です。

その稽古中に宗十郎が仁左に申しまするに

『菊畑の院本には書損ひがある。それは鬼一の臺詞に、是この花は打水に、露を含んで濡れさぎや、とあるがこれは花であるからざきでなければいけない。お前一つ調べて見い』

との命令を受けましたので、仁左はその翌朝當時の名人でありました竹本津太夫のところへ參りまして宗十郎の話を申しまするとと、津太夫はハタと膝を打つて

『流石に宗十郎だけのことはある。自分も實は濡れざきと語つてゐる』

と自分の床本まで出して話して呉れましたので仁左は津太夫の家を辭し、この由を宗十郎に申し傳へ樣と思つたのでしたが、心の何處かにどうしても腑に落ちない所がある樣に思へて仕方がありません

『しかし、文耕堂程の作者が書損ひをすると云ふ筈はあるまい』

これが仁左のどうしても合點のゆかぬ一點でした。そこで仁左には豫ね豫ねよく顔見知りの植木屋がありましたので、その足で一應その植木屋に問ひ訊さうと思ひ付きまして、その植木屋の家を訪れ「濡ざぎ」の一件を話しますと、幸ひ菊に關する秘本の所持して居りましたので、

五世菊五郎逸話集

菊五郎の研究心

巷間すべての事物に研究の目を見張つてゐた五代目は、それ等を舞臺の上に用ひるに妙を得て居た。

或る時優の家に物貰ひの遊び人が來た事がある。女中のお竹が旦那もお神さんもお留守だと云つて居るのを五代目が障子越しに見て「已れに會ひ度ひと云ふが何の用だ」と聞くと「親方一杯呑ましてお呉ンなセイ」と云ふので「あゝ酒か、酒なら臺所にあるから何程でも呑んで行つたらよかろう」と云ふと、

「ダガネー親方一杯呑ましてお呉んなセイ」とさすがに始めから金を呉れと云はれないので「ダガネー〳〵」と云ひ淀んで居ると云ふ有樣であつた。これは面白い、と目をつけた彼は「オイお前のお酒はこれだろう」と金二圓を投げ出してやつたらさすが菊五郎だ解りが早いと喜こんで歸たと云ふ。

菊五郎この「ダガネー」を三年目に「文七元結」で舞臺に用ひた、左官の長兵衛の役をやつて居たが幸藏の女郎屋の番頭がよびに來

その本に就いて調べますと立派に『濡さぎ』と云ふ菊の名稱が乘つてゐたではありませんか。この大發見をした仁左は喜び勇んで再び津太夫のもとへ取つて返し菊の秘本に就いて一部始終を話しますと津太夫は

『よい事を敎へて下さつた。今日まで自分の得手勝手な推量で間違つたことをお客樣にお聞かせ申してゐたのは申譯けがない』

と神棚に向つてお詫をし、仁左にも厚く禮を述べたと云ふことであります。次いで仁左は宗十郎にこの話を致しますと

『お前のお蔭で間違ひを云はずに濟むだ』

と大變仁左は面目を施した譯でありました。

又仁左は虎藏の衣裳に就いて左の樣な意見を持つて居ります。即ち、虎藏の着るガンギの衣裳は文樂で忠臣藏の力彌の着る衣裳である。それを或る急な場合に虎藏に着せたのが一つの型になつて終つたのであると云ふのです。そして松崎屋の虎藏の衣裳は紫濡子に金絲の菖蒲皮模樣を縫つて、襦袢は緋縮緬へ白拔の金輪棠でなければならないと申して居ります。

又仁左の虎藏に就いての心得は、虎藏は十六才ですから絶えずその心得で、竹床几へ掛けるのにも足を下へ附けない事また、智惠內に私語く時にも背を伸して話すことなぞその工風を述べて居ります。こんな些細なことでも知つてゐると、芝居を見る時は大變面白さが加つて來ると思ひましたので書き加へた次第で御座ゐました。

——了——

一俊松平

團十郎と「世纏太鼓功」をやつた時、團十郎の酒井に、菊五郎は常右衞門に扮したが、酒井が天主櫓の上から太鼓を打ち終つて常衞殿、どんなものだと云ふと、菊五郎の常右衞門がポンと手を打つ所がある、ところが手に小櫻革の手袋をはめてゐるので音がせぬ。素手で手拍子を打つと世話物になる、これを注意された優は「なる程最だ明日見直して呉れ」と云つて、工風を凝らして、翌日から兩手をたゝかないで、鎗で突かれた疵のある足のところをポンと片手で叩いて、「ア、痛い」と云ふ思ひ入れに改めて了つた。現在の舞臺にもこの型が殘つて居る位だ。

こうしていくら大名題になつても、どんな人の言でもよい事はどし〳〵とり入れるところに彼の偉大さがあり彼の藝の完璧さがあるわけだ。

て「オイ長兵衞さん、お神さんが急用だと云ふからサア〳〵、直ぐ歸つて呉れ」と云ふと、五代目は自分の着物を指差して「ダガネー後から行くから」と是を度々繰返して云つて、まさかこのなりでは行かれないから着物の都合をして後で行くと云ふ事が明らかに云へない所に用ひたわけであつた。

★

〝前進座〟断想

僕は前進座と馴染みになつてから相當古い。前進座といへば、この劇團全體が、僕にとつて、他人でない、友人淨といつた感情でつき合つてゐる。

僕は仕事の上で、演劇の方を分擔してゐるのであるが、生來、出無精で、こちらから人を訪ねることのあまり好きでない。自分でいふのはおこがましいが、いはゆる孤高性といふやうな性分をもつてゐるらしい。僕は、劇壇人殊に俳優諸君とは、遺憾ながら太して深い交際がないし、面識すらない人が多い。

ところが、前進座だけは例外で、長十郎君、瓢右衛門君、國太郎君をはじめ座員の殆どすべての諸君を知つてゐるし、それらの諸君一様に

「オイ、君！」

といつて、肩を叩きたいほど親しみをもつてゐる。

◇

これはどういふわけか、僕自身はつきりわからないのだが

最初いまの商業主義的劇壇に反抗して立つた青年客氣の諸君を愛する氣持にはじまつたことはたしかだが、いまの氣持はそれだけではない。

いつまでも童心を失はぬやうに見える諸君の朗らかさ、素直さも嬉しい。

俳優らしくない朴訥さ純情さ、などもある。

みんながみんな相當のカルチュアがあり、インテリーらしいニューアンスをもつてゐるのも有難い。

つまり、一口にいへば、いつの間にやら、前進座が好きになつてしまつたのだ。

僕一人が好きなのでなく、僕の家族全體が好きなのだ。家族といつても妻と九つの道子だけなのだが。

三四年前のことだが、前進座が僕の家に名古屋の大根干を贈つてくれた。その時、妻は

「いかにも前進座らしい贈り物ですわね。」

と、明るく微笑みながら、それを酢の物にしてくれた。パリ〳〵と齒ざはりがよくて素適にうまかつた。僕は晩酌の

高山辰三

杯をあげて前進座の前途を祝福した

◇

いつも元氣で愉快な芝居を見せてくれる新國劇も、僕は好きだが、この頃やゝもすると大衆に近より過ぎる傾向が見られる。面白い芝居を見せて、大衆から觀客層をグン〳〵引抜くことは強ち惡いことではないが、迎合に過ぎて、啓蒙を忘れ去ることは淋しい。それからもう一つ、新國劇にさゝやかなる抗議をしたいことは、東京の公演と大阪のそれとを比べると大阪へ來た場合、いくらか手を抜く傾向を見るのは愉快でない。

とすると、現代のわが國の劇團を見廻はして、青年劇團としての前進座は、何といつてもユニークな存在たるを失はない。

前進座の進むべき道は、古典歌舞伎の再吟味もよい、新しい喜劇の開拓もよい、その他色々あらう。

たゞひたむきに精進だ。そして自ら高うする矜持をいつまでも失はないことだ。

僕はの五月浪花座公演の「だんまり鼠の洞」をはじめ「街の風景」「たつた一人の女」「戀の旗本退窟男」などの狂言にも多くの望みをかけて、見物の日を樂しみながらこの取りとめない筆を擱く。（四月二十六日）

萬人愛好の撰良車

ケンネットル号

登錄商標

MACHINE GELUK KENNET CYCLE ROG THOR PARK GUARANTEED

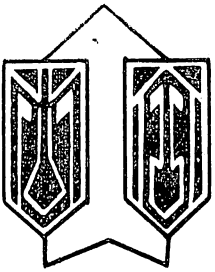
京都市三條通小橋西

株式會社 大澤商會

市内特約店ニアリ

國産品中の完璧　是非御愛乘を

吾等の前進座前進譜（A）



切實に思ふのですが、私共前進座が、經濟的な索制や、興行的條件や、その他いろ〳〵な點に、少く共束縛されないで、心から演りたいと思ふ演劇を、希望通り公演出來たら……とつく〴〵思ふのです。

そしたらこの貧しい手も細つた脚も、疲れた胸部も明るい陽光を浴びた若葉の様に伸びのびと何も彼もが發達して了ふのですが尤も現在、この私共から遠く押し離されてゐる理想をば全き姿で現實化する事は、倒底不可能な事なのですが、しかし、そのために、だからと申して決して悲觀說に疵古たれるのではなく、それに近いものへの具體化へと、少しでも現し得るものは、私共前進座の、心を一つに歩行する者、仕事と責任とを相互に認識し合つてゐる者、そして前進座と云ふものを發展させて行く者だけが「本當の芝居は——前進座」「前進座の様な劇團だけがつくり得る芝居」の完成へ一歩々々近づけるものではないだらうか？と考へられるのです。

依つて、前進座の座員はいつも、生活力に滿ちた努力の寸時を續けなければならないのです。平易を希んだり、怠惰を盜んだりしたのでは、忽ち怒濤の様な仕事の壓力に奔弄されて、道を失つた明盲同然にされて了ふのです。停幣を知らずに一時の華な「人氣」と云ふ餌に身を委ねたら……どうなるでせう。

ですから、私共前進座では、萬一、それらの芝居道の腐敗した波のきらめきに幻惑されて、走り去らうとする者があれば、お互ひに呼びあつて、その惡夢からの覺醒を絶し合つて、今日迄來ました。

そして、今日、かうした中から、觀ていたゞける私共の芝居は、常に健康な、明るい、且つ面白く解り易いと云ふこと。しかも決して卑俗なものに墮すことなく、藝術的に薫り高いものである樣、努力する所以なのです。

此の爲には、またこの仕事に携はる私共座員全部が、新らしい劇場人としての自覺をもつことによつて爲されるので、私共演技者も、舞臺だけの無意識な所謂「人形」であることを許されないのです。

舞臺の端は、この廣い人生に連なつてゐる。その中の自己を忘却する事なく活きた人生再現に努める者として、懸命な活動を續ける事が必要なのだ、と思ふのです。

そしてその意氣で吾々は今日まで前進して來たのでした、その成果が如何に小さきものであつたとしても全々無意義ではなかつたことを確信してゐます、その故に次の前進にはより以上の努力とそなへが必要であるわけです、

吾々は益々團結をかためて邁進する意氣と熱を尙多分に持つて居ます。吾々の熱も吾々の事業への一ツの要素であるわけです。

かうした考へ方こそ、前進座の未だ若い私共の誰れも、瞬時も忘れてはならない、又忘れ得ない、正しい仕事を最もよく生かす原動力になるのだと信じるのです。

これが、編輯子より與へられたたつた一つの前進座が特異とする「吾等の前進譜」とも云ふべき點でありませう

その一つの現れは、覺束ない乍らも五月の浪花座公演で、皆樣に觀ていたゞけるものと思ひます。

そして次に發表する吾々の「前進譜」に、より以上の意義を持ち得る事を熱望して止まないわけです。

河原崎長十郎

吾等の前進座前進譜（B）

曾て（それはもう數世紀前の樣な、遠く彼方の樣な氣がする）私が未だ歌舞伎團にゐた時分は、經濟的な多少のぜい澤さや、悪い意味の自尊心を募らせる俳優同志の競爭とか、上位とか下位とかの區別があつて自分は（私はその頃名代級として遇されてゐました。）自分に與へられた位置で、自分だけのことをして、或時は人に嫌味を云つたり人に言はれたり、使はなくてもいゝおべつかを使つたり、使はれていゝ氣持になつてみたり、――そんな風な悪夢の半生とも云ふ可き狹い生活の中でもまれて過したものでした。

で、私はその時分自分の仕事が樂しかつたかと云へば少しも希望なく、愉快でなければならぬ筈の舞臺生活では常に味けなく孤獨でした。ですから當然のはけ口を怠惰なものへと浪費する事も當然の事だつたのです。

心から親しみ合つてくれる人もなくまた自分の方からもうつかり安心して解放出來ないで、唯小さい自分と云ふ者の立場を保持してゐたと云つた狀態でした。

これが今日でも所謂世間なのかも知れません。さうした私と――表面的にはもつと多大な努力と苦しみをなめてゐる前進座になつてからの私（勿論この場合他座員も同じく論じられますが）とは、内的には全く正反對なものと變つてゐるのです。

これは驚くべき事です。

經濟的に全く乏しい（今日の社會で經濟力が絶對的であるに對し）背景もなく、同時に私達前進座が存在して行けるか、どうかと危まれた私達の對社

あぶら取紙始祖　辻占添附

スキナあぶら取紙

姉妹品

スキナ紙白粉

スキナ石鹸

專賣特許　實用新案

スキナ御化粧紙

（あぶら取兼紙白粉）

各品共御愛用を乞ふ！

登録商標

發賣元　大阪　朝日堂株式會社

本舗　大阪　中田スキナ屋謹製

昭和二年十月廿五日 第三種郵便物認可
昭和十年四月廿日 印刷（毎月一回）
昭和十年五月一日 發行（一日發行）
「道頓堀」第百四輯 第十年 五月號

オールトーキー

らくだの馬

才人 井上金太郎監督が久し振に撮るお笑の權化映畫

高田浩吉・飯塚敏子 主演

小笠原章二郎
志賀靖郎
山路義人
澤井三郎
中川芳江
葵 令子
小牧千鶴子 助演

「道頓堀」第百四輯 第十年 五月號

一部 金參拾錢

切封 日近